

「聖書の大きな流れを 覚えつつ」



関西聖書神学校校長 鎌野 直人

あなたのみことばは 私の
足のともしび 私の道の光
です。

詩篇119・105（新改訳2017）

日めくりカレンダーに書かれているみことばを毎日味わう。『ペラカ』の聖書日課を用いて、毎日一章、聖書を読む。礼拝の説教箇所をその週の糧とする。みことばを味わう生活は教会学校の教師にとつてとても大切なことです。

とはいえ、断片的にしか聖書を味わわないとき、見失うことがあります。聖書全巻は創世記からヨハネの黙示録まで、旧約聖書から新約聖書までを貫く一つの大きな流れがあるからです。今年度から新しいカリキュラムが始まり、創世記から学び直します。この大きな流れを踏まえて学び、教え、共に考えていくことを始める絶好の機会です。

天地創造から始まった、すべての被造物を、ご自身の栄光で満たすという神のわざは、神と共にこ

の働きをする使命を受けた人が自らを神としようとしたことによって頓挫しました。しかし、神はアブラハムを選び、その子孫イスラエルをエジプトから救い出し、彼らと契約を結び、ダビデの家系を彼らの王として立て、彼らを世の光としようとされました。しかし、イスラエルはそれでもなおこの神を神とせず、ついにはバビロンへ捕囚されるのです。

しかし、神は御子を地に遣わし、世界の光となるイスラエルの使命をイエスの誕生と宣教と十字架と復活を通して果たさせられました。今やイエスは、天に昇られた王として世界を治めておられます。さらに、弟子たちを世界に遣わし、ご自身こそが世界の王であり、罪と死の支配を打ち破ったというよい知らせをあらゆる民に知らせさせています。そして、弟子たちが集められた教会によって神の栄光が世の光として罪に満ちている世界に現されています。イエスはもう一度、地上に來られ、天と地を一つにして、罪と死を完全に滅ぼし、神の栄光に満ちた世界を完成されます。

聖書のこのような大きな流れの中のどこについての聖書の箇所なのかを心に留めるとき、毎週の教会学校がより豊かなものになるのではないでしょう。

牧羊者

目次

巻頭言	1
目次	2
カリキュラム	3
教師養成講座「教会学校における 次世代への宣教と信仰継承(2)」	4
受難・復活 $\blacktriangle 4/5 \sim 4/12 \blacktriangledown$	9
創造・墮落 $\blacktriangle 4/19 \sim 5/24 \blacktriangledown$	21
キリストの教え $\blacktriangle 5/31 \sim 6/28 \blacktriangledown$	57
牧羊ひろば(西舞鶴教会)	87
カリキュラム解説	93
「牧羊者」のご購読・ご利用について	94
おわりに	94

〔凡例〕

1. 原語について：ギリシャ語は〔ギリ〕、ヘブル語は〔ヘ〕、アラム語は〔ア〕で表記しています。
2. 礼拝メッセージ例の最後の「さんび」の略記について
こ：「こどもさんびか」、こ改：「こどもさんびか改訂版」(以上、日本キリスト教
団出版局)、ホ：「教会学校・日曜学校 子どもさんびか」(日本ホーリネス教団出
版局)、イン：「教会学校さんびか」(インマヌエル教会学校部)、ふ：「ふくいんこ
どもさんびか」、GS：「ふくいんこどもさんびか2 グローイング・ソング」(以
上、日本児童福音伝道協会)、PW：「プレイズワールド」(リビングブレイズ)

造り主なる神を知る

創世記 1・1

● 受難・復活

行事

テーマ

聖書

暗唱聖句

4月5日 棕櫚の日・進級式 十字架による救い

ヨハネ 19・28～30

同 19・30節

12日 イースター 復活の主との出会い

ヨハネ 20・11～18

同 20・13節

● 創造・墮落

4月19日

天地創造

創世記 1・1～31

同 1・1節

26日

人間の創造

創世記 1・26～31

同 1・27節

5月3日

罪の始まり

創世記 3・2・11～17

同 2・17節

● キリストの教え

5月31日

ペンテコステの恵み

使徒 2・1～11

同 2・4節

6月7日

花の日・子どもの日 さいわいな人

マタイ 5・1～12

同 5・3節

14日 花の日・子どもの日 思い煩いからの解放

マタイ 6・25～34

同 6・28節

21日 父の日 天の父の愛

マタイ 5・43～48

同 5・45節

28日 主の祈り

マタイ 6・7～13

同 6・10節

10日 母の日 両親に従う

エペソ 6・1～4

同 6・1節

17日 罪の結果

創世記 3・6～19

ローマ 6・23節

24日 救いの約束

創世記 3・14～24

同 3・21節

教会学校における 次世代への宣教と信仰継承(2)

香登教会 工藤弘雄



二〇一九年度の教団標語は「今こそ、次世代への宣教と信仰継承」でした。ところが二〇二〇年度も同じ標語が選ばれたのです。それほどに「次世代への宣教と信仰継承」が重要視され、また緊急の課題となっているのです。「いまこそ！」です。それは教会学校においてこそ求められることではないでしょうか。今回は「聖書が語る次世代への宣教と信仰継承」でした。今回はその実践面です。

今、私たちが取り組むべき次世代への
宣教と信仰継承

一、家庭における取り組み

次世代への宣教と信仰継承はまず家庭から始まります。両親がクリスチャンでなくても父親か母親がクリスチャンである家庭の子どもはすでに「聖なるもの」(イコリント7・14)とされているのです。聖書における救いはあくまでも個人から始まりますが、その約束は全家庭に及ぶのです。ですから、まず家庭からの取り組みについて見ることにしましょう。

①胎児の頃から

それは「幼い頃から」始まります。この「幼い」は胎児を意味するプレフォースという用語が用いられています（Ⅱテモテ3・15）。ですから「胎児の頃から」、つまり「胎教」を意味するのです。そうです。母親のおなかの中から、「次世代への宣教と信仰継承」は始まるのです。母親の祈り、賛美などはすべて胎児に伝達されます。母親の礼拝出席などは最高の胎教と言えるでしょう。先日、三百グラム以下の嬰兒の出産のニュースを耳にしましたが、胎内の子どもはどんなに小さくても人格的に立派に成長していくのです。

②読み聞かせ

親子の会話ができる頃になると「読み聞かせ」の段階に入ります。紅葉のような手を組んでお祈りをさせる。一緒に神様を賛美する。そして聖書物語（絵本）などを用いて読み聞かせをする。そのとき子どもたちの目はキラキラと輝くことでしょう。

③聖書の学び

さらに幼少時になると聖書そのものの学びに入ります。バックストン先生の幼少の頃、両親は「聖句探し」

の遊びをしたそうです。聖句にAPとかLGとつけさせ、神様が祈りに答えられたこと（アンサーズ・トゥ・プレイヤー）を示すAP、神様の愛（ラブ・オブ・ゴッド）を示すLGなどをつけたそうです。読み書きの出来る段階になると、聖書一章を輪読し、母親がこれを説明したというのです。

ところでユダヤの伝統では、五歳になると聖書（旧約）の学びを始め、十歳でミシュナ（反復・ラビの口伝）、十三歳で戒め、十五歳でタルムード（旧約聖書に続くユダヤ教聖典）を学ぶそうです。

宗教改革者マルチン・ルターも「次世代への宣教と信仰継承」を大変重んじました。彼が著した『小教理問答』は、子どもにもわかる教理問答なのです。

それぞれの牧師家庭や信徒家庭ではどのような取り組みがされているのでしょうか。昨春、中国教区教会学校教師研修会の分かち合いの中で、後藤健一牧師家庭では就寝前の「絵本・聖書のお話」の読み聞かせと祈り、通学前の『きょうのマナ』（小野淳子著）の読み聞かせと按手祈禱、坪内信治牧師家庭では食卓での聖書や信仰についての分かち合い、聖書一章音読など紹介されました。

④家庭礼拝

「家庭礼拝」こそ最高最大の「次世代への宣教と信仰継承」の実践です。その取り組みは様々なバリエーションがあり、一様ではありません。大切なことは日々継続することです。多くの場合時間帯は朝食前の家族全員集まれる時間が選ばれます。しかし通学、通勤などのせわしさもあり、落ちついた夜が選ばれることもあります。時間帯については継続可能を考えて短くすることも必要でしょう。内容は、賛美・聖書・デボーションテキスト・祈りなどが定番ですが、時間の割り振りから、聖句を読む、賛美は一節、解説も短く、祈りも簡潔にする場合もあります。時間が許されれば、じっくりできます。多くの場合家長のリードで行われます。ピューリタンたちにおいてはクリスチャンホームの父親はその家庭の牧師的存在であったと言われます。

二、教会学校における取り組み

教会学校こそは次世代の宣教と信仰継承の本体です。現在教会学校では生徒の減少、一般家庭からの生徒の激

減など多くの課題があります。ですから教師の忠実さと教会全体の理解がますます求められています。では教会学校ではどのようにこの課題に取り組んだら良いでしょうか。

①毎週の教会学校における礼拝と分級の取り組み

教案『牧羊者』の使い方や教会学校の現状、今日的な課題などについて各教会の教師会において、また教区ごとで分かち合うことはどうでしょうか。毎週の教会学校の生徒数、年齢構成、教会学校の礼拝や分級の現状、主日礼拝との関わり、一般の子ども伝道のあり方など、現状分析と浮かび上がる課題、その課題への取り組み、新たなビジョン、聖霊による重荷と成し遂げる知恵と動力など、教会内でまた各教会間においては是非分かち合っていただきたいのです。昨春の中国教区の教会学校教師研修会でもこの分かち合いがとても有意義なときとなりました。

②教会学校教師の使命と聖別

教会学校の現状分析と浮かび上がる課題の取り組みと共に、さらにもう一つ大切なことは、教会学校の教師のあり方です。神様のみわざは何をなすかということよりもなんであるかが問われます。よく言われる「働きは働

き人」にあると言うことです。そのために教会学校の教師がしっかりとした使命をもっているか、そのために聖別された器であるかを自問自答していただきたいのです。教会学校教師は非常に忍耐のいる奉仕です。しかし、教会において最も尊い働きの一つです。ですから神から与えられた使命感をしっかりと持つこと、そのためにあらゆる汚れと肉性から十字架の血潮によりきよめ別たれ、聖霊に満たされることです。

三、合同（大人と子ども）礼拝における取り組み

前回見たように聖書は大人と子どもを決して分離していません。ですから今日私たちの教会においてこのあり方が最大の課題となっています。大人と子どもが一緒に礼拝ができるでしょうか。一般礼拝と教会学校が一つとされるでしょうか。

第一のケースは、現状を生かすケースです。教会学校をしっかり行い、その上で子どもが可能な限り一般の礼拝に参加することです。これは子どもにとっても保護者にとってもかなり負担が多くなりますが、それに見合う

収穫があります。子どもが大人の礼拝に出席しても理解できるでしょうかとよく問われます。答えは「できます」です。子どもは礼拝を体で理解するのです。頭の理解を越えたところで礼拝の厳かさ、素晴らしさを理解するのです。むしろ、子どもの年齢にもよります。子どもを飽きさせない知恵も求められます。こうしたことについて課題はありすぎるほどありますが、そこは教会において教会間で語り合い、分かち合い、聖霊の知恵と力を祈り求めようではありませんか。

第二のケースは、大人と子どもの合同礼拝を随時持つケースです。そのときは礼拝も特別なプログラムとなります。家族礼拝という名称で行われている教会もあります。説教も子どもにターゲットを合わせて行う。DVDなどを用いる。子どもの聖句暗唱を入れる。子どもの賛美を多用する。こうした礼拝を年に何回か持つことで、教会学校が教会の最も大切な働きであることを理解できるでしょう。

第三のケースは大人と子どもを分化せず、毎週行うケースです。どのようにしてそれが可能でしょうか。

その事例として岡谷教会（田中裕明牧師）の礼拝を紹

介しましょう。開始は10時15分。合同で賛美・「主の祈り」・賛美・祈りなどの後に5分ほど「子ども向け説教」をする。これは子どもだけでなく大人も興味津々です。続いて分級（牧師の説教の間）階下にて。その後、合同で賛美・献金・祈り・頌栄・祝祷・牧師による前に進み出た子どもへの挨拶祈禱。このケースは英国では一般的です。岡谷教会では教会学校教師を中心に9時から第一礼拝を行っています。このケースであれば教会学校教師の時間的負担は大人と子どもの礼拝を分化してもしなくても変わりません。しかし、子どもと保護者の時間的負担は非常に軽くなります。

四、特別プログラムにおける取り組み

毎週の教会学校や礼拝に出席できる子どもたちは親が信者の場合が圧倒的です。しかし一般家庭の子どもが毎週の教会学校に出席することをどの教会でも切に求めていることでしょう。過去の例を見ると戦後20～30年間は教会学校が盛んで、毎週の幼小学科、中高科に一般家庭からも多くの出席者がありました。しかし現在、毎週

の教会学校出席者が減少していく中でどのように次世代への宣教、子ども伝道がなされるか、ほとんどの教会が祈り、考えさせられています。

すぐに毎週の教会学校に一般家庭の子どもたちが出席できなくとも、その下地となる取り組みとして年間恒例の行事の中に様々な取り組みを多くの教会は行っていることでしょう。例えば、イースター、母の日、夏期聖書学校、バイブル・キャンプ、幼児祝福式、子ども大会、クリスマスなど、恒例の行事への子どもたちの参加です。加えて家族礼拝（特別のプログラムで）や特別音楽プロジェクト（教会におけるコーラス・音楽バンド・キッズクワイヤー・地域の音楽活動との提携）、学習セミナー（イングリッシュ・キャンプ、ユース・セミナー）、子ども食堂、野外子ども伝道、ボーイスカウトへの参加、協力、その他様々な取り組みがあげられます。

次世代への宣教と信仰継承！ 聖書がどのように語っているか、改めて真剣に耳を傾けましょう。そして聖霊の導きを求めつつ、具体的に信仰と希望と愛をもってこの課題に取り組みましょう。

聖書

ヨハネ19・28～30

タイトル

十字架による救い

暗唱聖句

イエスはさう酒を受けて、「すべてが終った」と言われ、首をたれて息をひきとられた。

ヨハネ19・30

目標

キリストが十字架上で成し遂げられたみわざに信頼し、神との交わりに生きる。

導入

(後藤 真)

今日は「しゅろの主日」と呼ばれる日です。イエス様が子ろばに乗ってエルサレムに入ったことを記念する日です。イエス様が子ろばに乗って通る道に、人々は自分の着ていた服や、木の枝を敷いてお迎えしました。そのときの木がしゅろの木だったかどうかは分かりません。ただ、みんながエルサレムに入るイエス様を大歓迎したということは間違いありません。

十字架の上で

ところがみんなが喜んでお迎えしたはずのイエス様は、エルサレムに入って一週間もたたないうちに捕まえ

られ、十字架にかけられました。法律に背くことは何一つしてないのに、裁判にかけられ、犯罪人として死刑にされたのです。十字架はすぐには死なず、長い時間苦しむ刑でした。イエス様は何時間も十字架にかけられたまま苦しみました。でも、その苦しさの中で、人々や弟子たちに大切なことばをお話しくださしました。

イエス様が「わたしはかわく」と言ったのは、体から血が流れて水分がなくなるので本当のどが渴いて苦しい思いをしたからでもあるでしょう。イエス様はその生涯の中で人間が味わう苦しみを経験してくださいました。十字架での苦しみさえも楽しみにしようとは思いませんでした。苦しいまま受け止められたのです。

人々はすっぱいぶどう酒を海綿（スポンジのようなもの）に染み込ませ、ヒソブというハーブの枝といっしょに木にくくりつけてイエス様の口にさし出しました。このできごとは、旧約聖書のことばが実現したものでした。イエス様の十字架は神様の計画だったのです。

たったひとりの子であるイエス様を、十字架にかけて苦しめるなんて、神様にとってどれほどつらいことだったでしょう。神様の計画、思いに従い通したイエス様

はどれほど神様の前にへりくだったのでしょか。

すべてが完成した

イエス様はすっぱいぶどう酒を受けると、

「すべてが終わった」

と、言つて死なれました。「終わった」というのは、完成したという意味です。神様が計画したこと、聖書に書かれてあること、神様がイエス様にまかせたことが全部そのとおりになり、目標が達成できたということです。

神様の計画とは何だったのでしょうか。大切なイエス様を十字架で苦しめてまで成しとげたかったことは何だったのでしょうか。わたしたちを救うことでした。聖書の中の聖書と言われるヨハネの福音書三章十六節を覚えている人がいますか。いっしょに言ってみましょう。

「神はそのひとり子を賜わたしたほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。」

神様はこの世界を愛しておられました。でも人間は神様から離れ、自分の思いどおりに生きようとしてました。神様を無視して自分の考えだけで生きingことを「罪」と

言います。神様のことを考えないで自分の好きなようにすると、争いが増え、弱い人がいじめられ、欲張りや嘘が広がり、みんながふしあわせになるのです。神様はどのように世界が減びていくことを何もしないで見ていることができませんでした。なんとかこの世界を救いたい、わたしたちに永遠のいのちを与えたい。その神様の思いが実現したのがイエス様の十字架でした。

「イエス様が十字架にかかって死んだ」と聞くと「かわいそうだなあ」と思う人がいます。もちろん神様、イエス様の苦しみは軽く考えてはいけません。でも、この十字架はただ苦しんで終わったかわいそうなできごとではありません。神様の救いがなしとげられ。罪と滅びに打ち勝った勝利のできごとです。

わたしたちをこんなにも愛してくださった神様の気持ちを受け止めましょう。この十字架が自分のためだと信じて、自分をいちばんにする罪から救っていただき、神様といっしょに生きていきましょう。

♪両手いっぱいいの愛♪

(新聖歌483、PW13、ホ146、イン41)

聖書 ヨハネ19・28～30 テーマ 十字架による救い

序論

(高橋頼男)

主イエスは、十字架にかかり死なれましたが、そのとき、大声で「成し遂げられた」(新共同訳)と叫ばれました。これは、罪人の救いのみわざを十字架の贖いによってついに完成したことを宣言されたのです。私たちは、このイエスの十字架によって完成された贖いのゆえに、信頼して救われることができるのです。では、この完成された救いとはどのような救いであつたのでしょうか。

一、完成された救い(30)

〈すべてが終った〉(口語訳)は、また、「事畢りぬ」(文語訳)、「完了した」(新改訳)、「成し遂げられた」(新共同訳)と訳されています。〔ギ〕テレオーの名詞形〔ギ〕テロスは「目的、ゴール、目標」を意味し、やるべきことをきちつと成し遂げて終わったということです。主イエスは、十字架の上でこのような意識をもって救いの完成を宣言し、息を引き取られました。

私たちの救いは、主イエスの十字架で完成された救い

のみわざに全く信頼することにより始まりました。そして、最後まで、これに信頼し続ける以外にはありません。キリストが十字架で成し遂げられた救いに付け加えるべきものは何もありません。十字架でなされたキリストの救いを土台にして、私たちの努力や頑張りで救いを完成するのではないのです。

万が一罪を犯したときも、クリスチャンはそれで終わりではありません。直ちに罪を認め、告白し、その罪を捨てることです。そうするならば罪は赦され、そのとがめは取り除かれます。しかし罪が赦されているにもかかわらず、いつまでも罪責感を抱き続けて苦しんでいる場合があります。すでにとがめは取りさられ、その棘は抜かれています。抜かれた痕はしばらく痛みが残るかもしれませんが、十字架において完成してくださったキリストの全き贖いに信頼して、信仰によって歩むことです。「信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つつ、走ろうではないか」(ヘブル12・2)。

二、完全な救い(ヘブル9・27～28)

完成された救いは、完全な救いをもたらします。人間の罪は、贖われ赦されることなしには、解決がありません。

ん。しかも、その贖いは完全でなければなりません。キリストは神であられたのに、人となってこの世に来てくださり、罪のないきよい生涯を全うされました。そして、その身をもって罪ある人間の身代わりとして十字架にかけ、その贖いを完成してくださいました。キリストの贖いは罪人を完全に救う、力ある贖いです。

キリストは十字架の死に続いて、復活されました。そして、死からの救いを成し遂げられました。人は死んで終わりではなく、肉体は罪のゆえに朽ちても、救われた魂は栄光の体を着せられ、甦よみがえることができるようになります。

キリストは、私たちの義となってくださいました。「わたしたちは、キリストの血によって今は義とされているのだから、なおさら、彼によって神の怒りから救われるであろう」(ローマ5・9)。

キリストの贖いは私たちの罪を完全に贖い、死から救い、神の怒りからも救い出してくださいました。完全な救いです。

三、永遠の救い(ヘブル9・12)

完成された救いは、完全な救いをもたらし、また、永遠の救いを約束します。旧約時代においては、人間の罪の贖いのために規定によっていけにえがささげられ、大

祭司による贖いの儀式が繰り返されました(レビ1・7章)。しかし、これらの贖いはたびたび繰り返されねばならず、しかもそれらのささげ物やいけにえは、人間の良心を完全にする(きよめる)ことはできませんでした。しかし、もはや繰り返されることのないキリストの血によるただ一度の永遠の贖いが、十字架において成し遂げられたのです。

「ご自身の血によって、一度だけ聖所にはいられ、それによって永遠のあがないを全うされたのである」(ヘブル9・12)。

「彼は一つのささげ物によって、きよめられた者たちを永遠に全うされたのである」(ヘブル10・14)。

結論

キリストが十字架で成し遂げられた救い、キリストが十字架の上で大声をあげて宣言された救いは、何と偉大で完全な救いであることでしょうか。私たちの救いとその活動は、主の完成されたみわざを出発点とし、そして、この救いの良いみわざは必ず完成されていくのです(ピリピ1・6)。この完成された救いのみわざに信頼し、完全な永遠の救いを獲得しましょう。

研究資料

(中島啓一)

テキスト

28 万事が終わったことを知って「終わった」は〔ギ〕テレオーの完了形テレスタイ(30節の「終わった」も同じ)で、「(自分や他人の意志を)遂行する」、「(義務を)果たす」、「(債務を)完済する」などの意で用いられる。ここでは、父なる神が御子に託されたすべてのこと、聖書に預言された一切のことが「達成された」、「完成した」という勝利に満ちた意味に訳すべき言葉。わたしは、かわくユダヤ地方の強い日射しは、十字架上の受刑者から急激に水分を奪った。イエスは「わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがない」(4・14)と宣言されたが、その水を与えるためには、ご自身が極限の渴きを経験せねばならなかったのである。なお、この記述には、イエスの肉体性、人性を否定する初期の異端である^{ドクテイズム}仮現論を退ける意図も含まれているかもしれない。聖書が全うされるため これは、「彼らはわたしの食物に毒を入れ、わたしのかわいた時に酔を飲ませました」(詩篇69・21)と、おそらくは「わたしの力は陶器の破片のよ

うにかわき、わたしの舌はあごにつく」(詩篇22・15)を指すのであろう。渴きを訴えるイエスの言葉は、聖書の成就だけを目的とするこじつけではなく、その状況下で極めて自然に発せられたのである。

29 酔いぶどう酒 ルカ23・36ではあざけりの意味でこれがさし出されている。ローマ兵はのどが渴いたときに、ワイン酔を水で薄めたポスカという飲料(ハープで風味づけすることもあった)を飲んだと言われており、この酔いぶどう酒はそのポスカかもしれない。ちなみにマルコ15・23の「没薬をまぜたぶどう酒」は、受刑者の感覚を鈍化させ、苦痛を緩和させるためのもので、これとはまったくの別物である(イエスはそれを拒まれた)。マルコ15・36では、ひとりの人が、エリヤが登場するかを見届けるために、(おそらく気付けのような目的で)イエスに酔いぶどう酒を飲ませようとしたと記されている。このことから、この酔いぶどう酒は、苦痛を緩和させるどころか、かえって苦痛をはっきり意識させるといふ悪意をもつてさし出されたのかもしれない(ヒソプの効果については後述を参照)。ヒソプの茎 聖書に登場するヒソプはシソ科ハナハッカ属のマジョラム、あるい

はそれに類する植物と言われている。その葉にはメントールのような効果があり、兵士たちはボスカのリフレッシュ感を増すためにヒソプで風味づけをしたのかもしれない。その茎の長さは数十cmから長くても1mで、地上から十字架上に届かせるには十分な長さとは言えない。マルコは海綿を葦の棒につけたと記しているのも、その棒の先にヒソプをつけたのかもしれない。いずれにせよ、より重要なことは、ヒソプが象徴的に指し示すものである。すなわち旧約においてヒソプは、過ぎ越し(出エジプト12・21～22)や、清めの儀式(民数記19・6、18、詩篇51・7)の際に用いられたが、それらはイエスの十字架を予表するものであった。イエスの受難こそが真の過ぎ越しであり、イエスの血潮こそが、真のきよめを実現するのである。ちなみに「ヒソプ」(ギヒュッソポ)ではなく「投槍」(ギヒュッソ)だとする説もある(New English Bible など)。しかし投槍はローマの正規軍団のみが装備したという記録があり、また当時ユダヤに駐留していた部隊は正規軍団ではなかったことから、この説は退けられるだろう。

30 すべてが終った 28節と同じ(ギ)テテレスタイであ

り、同様に解釈するのがふさわしい。すなわち、イエスの受難を通してすべての預言は成就され、父なる神が御子を遣わした目的は達成されたという勝利宣言である。その御子の派遣の目的とは「この世が救われ」、「御子を信じる者が…永遠の命を得る」ことであつた(ヨハネ3・14～17)。それが果たされた今、救いは完成したのである。首をたれて 「首をたれる」は「人の子にはまくらする(直訳は「首をたれる」所がない)(マタイ8・20)でも用いられており、眠りに関して用いられることが多い表現。息をひきとられた 直訳は「息(霊の意もある(ギ)プネウマ)を(父に)委ねられた」で、ルカが記録する「父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます」(ルカ23・46)というイエスの言葉と符合する。同じ表現を用いる詩篇31・5は、敬虔なユダヤ人が夕べの祈りの際によく朗読した箇所である。キリストは最後の息を引き取る直前、まさに人生の夕刻に、眠りにつく前のような平安な祈りを神にささげたのである。

参考図書 注解書 Beasley-Murray (Word), Bruce (Eerdmans), Lindars (New Century Bible), その他 The IVP Bible Background Commentary: NT 他

聖書

ヨハネ20・11～18

タイトル

復活の主との出会い

暗唱聖句

女よ、なぜ泣いているのか。

ヨハネ20・13

目 標

悲しみの涙を取り除く、復活のキリストに出会う。

導入

(後藤 真)

今日はイースターです。最近はいースター限定のお菓子や、テーマパークのイースターイベントもあるので、イースターということばは少し有名になった気がします。でも、イースターの意味は、まだそんなに知られていません。イースターというカタカナよりも、日本語で復活祭と言ったほうがよくわかりますね。復活祭はいエス様がよみがえられたことをお祝いする日なのです。

空っぽのお墓

先週はいエス様が十字架で死なれたことをお話ししました。いエス様のからだはすぐに十字架から降ろされ、急いでお墓に入られました。夕暮れになると安息日にな

り、お墓のお世話などができなくなるからです。安息日にはしてもよいこととしてはいけないことが細かく決まっていたのです。

いエス様が十字架で死なれたのが金曜日。安息日は土曜日。そして安息日が終わった日曜日の朝早く、マグダラのマリヤたちはいエス様のお墓に行きました。ところが、行ってみるとお墓は空っぽ！ いエス様のからだを巻いていた布だけがそこに置かれていました。

マリヤはお墓の外で泣きました。いエス様が十字架で死なれただけでも悲しくてつらいのに、からだまで盗まれたと思ったからです。泣きながらお墓の中をのぞくとそこに白い服を着た天使が二人いました。天使は、

「女よ、なぜ泣いているのか」

と、マリヤに聞きました。マリヤは答えました。

「だれかがわたしの主のからだを取っていったのです。そしてどこに置いたのかわからないのです」。

マリヤにはまだいエス様がよみがえられたことが分からなかったのです。

「マリヤよ」

マリヤが泣きながら後ろを振り向くと、そこにだれかが立っていました。マリヤはそれがだれだか分からないで、お墓のあった園の番人だと思ったのです。

「女よ、どうして泣いているのか。だれをさがしているのか」

と、その人に聞かれて、マリヤは言いました。

「もしあなたがあの方をどこかに動かしただけなら、教えて下さい。わたしが引き取りますから」

その人は呼びかけました。

「マリヤよ」

マリヤはその人がイエス様だとやっと分かりました。そして振り返って、昔から呼んでいた呼び方でイエス様を呼びました。

「ラボニ」

イエス様にすがりつこうとするマリヤに、わたしにさわってはいけない（すがりついてはいけない）よ、とイエス様はお話しました。よみがえられたイエス様は、やがて父である神様のところに行かなければならないのです。マリヤはイエス様にそのことを伝えるようにと言わ

れ、弟子たちのところに行きました。そしてイエス様に会ったこと、イエス様のお話したことを伝えたのです。

マリヤも、わたしたちもイエス様といっしょにいると安心します。イエス様がいっしょにいないと思うと心配になり悲しくなります。イエス様は歴史の中では二千年も前に十字架で死んだ人です。もしそれで終わりなら悲しいだけです。でもイエス様はよみがえられました。よみがえられたイエス様は今も生きておられ、わたしたちのお祈りを聞いてくださるのです。

マリヤがはじめイエス様になかなか気づかなかったように、「死んだ人間がよみがえるなんて絶対ないよ」とはじめから疑ってしまふと、はよみがえられたイエス様に気づきにくいでしょう。イエス様が今も生きていると信じてみましょう。そして、生きているイエス様を礼拝したり、お祈りして話しかけてみましょう。そうすればイエス様が生きていることが分かるかもしれませんね。そしていっしょに心から復活祭、イースターをお祝いしましょう。

♪主は今生きておられる♪（PW49）

聖書 ヨハネ20・11～18 テーマ 復活の主との出会い

序論

(高橋頼男)

十字架に愛するお方の死を確認し、そのなきがらがヨセフの墓に納められるのを見届けたマグダラのマリヤは、安息日が明ける日の朝、まだ暗いうちから墓に急ぎました。墓に着くと墓は空っぽでした。空虚な墓の外で泣いているマリヤに復活の主イエスが現れ(マリヤよ)と呼びかけられました。マリヤは振り返って主を認めると、悲しみに押しつぶされていた心に喜びが爆発し(ラボニ)と叫んで主にすがりつこうとしました。復活の記事は喜びに溢あふれています。甦よみがえられた生ける主にお出会いするならだれでも喜びに溢れます。キリストのご復活は、悲しみを喜びに絶望を希望へと一気に転換する出来事です。

一、悲しみの涙と悲嘆(11～15)

復活の朝、墓に急いでいたマグダラのマリヤは、ひたすらイエス様のなきがらを求めていました。なんととしてイエス様のお体に触れ、自分の手で心を込めて葬りの備えをしたかったのです。それは、愛するお方を失った

痛手を癒いすためのグリーフ(深い悲しみを受容するための心の過程)であつたかもしれません。ご遺体を目の前にして、お別れのための時間が欲しいと切に願いました。もし復活が無かつたとしたら、愛する者の死は過酷です。私たちはありつただけの涙を流し、その悲しみに身も心も任せて悲嘆に暮れるほがありません。この時、マリヤは生きておられる方を死人の中に求め、復活された主を空虚な墓に見出そうとしていたのです。主は甦よみがえられたのです、主は生きておられます。そして、マリヤのかたわらに立たれます。しかし、絶望に打ちひしがれた心、悲しみの涙に曇ったマリヤの目には、甦よみがえって生きておられる主、マリヤのそばに立たれる主を認めることが出来ませんでした。私たちもひどい悲しみや痛み、苦しみの中に全く見捨てられた者のように感じるときがあるかもしれません。しかし、私たちは見捨てられず、主は生きておられます。

二、悲しみを喜びに変える復活のキリストとの出会い(16～17)

主は再びマリヤに呼びかけてくださいました。(マリヤよ)と懐かしい声でいつものように呼びかけてくださ

いました。この時マリヤははじめて反応しました。主イエスとの親しい交わりを持つていましたから、そのやさしいみ声を聞き分けることができました。振り向くと、そこに甦って生きておられる主がおられました。マリヤは喜びのあまり（ラボニ）と叫んで主にすがりつこうとしました。マリヤは今、甦って生きておられる主を拝して、全く変えられてしまいました。これまでの主イエスとの交わりが、復活の主の呼びかけに応答することを可能にし、生ける主との新たな親しい人格的な出会いと交わりに導いたのです。キリスト復活の事実が目が開かれ、生ける主との出会いが導かれるなら、人の心と生き方は一変します。すべての事情と状況が直ちに変わってしまうのです。不信と絶望、落胆の中にあったあの弟子たちを変えたのも、四〇日間、彼らが復活の主に繰り返し何度もお会いし、彼らが、主が生きておられることをもはや疑うことが出来ない者とされたからです。主のご復活は、彼らに起死回生の転機をもたらせ、その後の彼らの生き方を変えました。さらに、ペンテコステのご聖霊は、甦りの主が内に生きておられることを鮮明にさせました。主は生きておられる、わがうちにお

られる。その時、内に命が溢れだし、信仰の躍動を感じ、生きる勇氣と力が湧いてきます。この主を仰ぎ、崇め、賛美し、生活のあらゆる場面で歌い続けましょう。

三、喜びの源である復活のキリストを伝える

(17)(18)

主が復活され、生きておられることを知ったマリヤは、もうじつとしていたことが出来ません。抑えがたい喜びと興奮の中に駆け出して行きました。一刻も早く、仲間にごの出来事を伝えるためです。同時に、マリヤにはまだどこかに恐れがあったかもしれません。甦られた主にお会いしたことが現実のように思われず、何か夢を見ているように感じるところがあったかもしれません。しかし、（彼らに伝えなさい）と復活の主が言われたお言葉は、はつきりと耳に響いていました。そのお言葉に従い、（弟子たちのところに行つて、自分が主に会ったこと、またイエスがこれこれのことを自分に仰せになったことを、報告した）のです。

結論

生きておられる主との出会いを通し、喜びに溢れて復活のキリストを宣べ伝えるものとならせて頂きましょう。

研究資料

(中島啓二)

テキスト

11 マリヤは墓の外に立って泣いていた その涙は、イエスの死そのものの悲しみ(11・31参照)に加え、その遺体が無くなった(「奪われた」と思っていた)ことによる悲しみのゆえであった。時代や地域を問わないことだが、ユダヤの文化でも遺体に対する無法(蹂躪^{じゅうりゃん}など)は御法度^{ごはつと}であり(サムエル上31章参照)、通常、墓荒らしでさえ遺体そのものには手をつけなかったと言われる。

12 白い衣を着たふたりの御使 白い衣は天的な存在であることの象徴であると共に、服喪の色である黒との好対照を示し、復活を象徴するものと言える。

13 だが、わたしの主を取り去りました… 遺体が盗まれたかと思ひ込み、よみがえりの発想が全くなかったマリヤは、天使を見ても、悲しみから解放されなかった。

14 ふり向くと、そこにイエスが立っておられるのを見た。しかし、それがイエスであることに気がつかなかった エマオ途上の弟子たちは「愚かで心のにぶい」(ルカ24・25)ため、イエスだとすぐには気づけなかった。マ

リヤの目を曇らせたのも、涙だけではないだろう。

15 園の番人だと思つて 墓が園の中にあつた(19・41)ことが勘違いの理由だろうが、園の番人であっても、墓を開けて遺体を移すなどあり得ないことである。けれどもマリヤは墓にもすがる思いで、もしあなたが、あのかたを移したのでしたら… と言つたのであろう。

16 マリヤよ それが主イエスだとマリヤが気づく瞬間は、人格的な呼びかけによつてもたらされた。15節では一般的な「女よ」という呼びかけであつたが、今ここで、イエスは「良き羊飼ひ」としてご自身の羊を名前で呼ばれたのである(10・3)。マリヤはふり返つて「羊はその(＝羊飼ひの)声を知っている」(10・4)。ヨハネが強調するのは、復活の主との個人的、人格的な関係性である。マリヤはすでに一度ふり向いていたはずである(14)。だが、その時はそれがイエスだと気づかず、おそらく視線を戻していた。それが今、自分の名を呼ぶ懐かしい声で我に返り、再びふり返つたのであろう。ラオニ(ヘブル語とあるが実際はアラム語(両者は親戚のような関係)で「先生」の意。一般的な「ラビ」よりも大きな尊敬を込めた呼び方だという説と、対照的により親

しみを込めた呼び方だという説もある。いずれにせよ重要なことは、マリヤがこれまでもいつも、イエスに対しこのように呼びかけていたであろうと言うことである。

17 わたしにさわってはいけない これはイエスがトマスに触ってみよと促されること(27)と矛盾するようにも思えるがそうではない。^[ギ]ハプトーは「触る」の他に「しがみつく、くっつく」の意もあり、新改訳第3版、新共同訳は「すがりついてはいけません」などと訳しているが、その方がよりふさわしいだろう。マリヤはイエスを「離さなければならぬ」ということである。それは、わたしは、まだ父のもとに上っていない からである。この「上って」は完了形であり、後の「みもとへ上って行く」が現在形であることを合わせ、イエスが今、昇天の途上にあることを示す。復活のイエスは地上にとどまり続けるのではなく、やがて(すぐに)天に昇られる。そうすれば今までのように肉眼で見、手で触れることはできなくなる。しかしイエスがかつて言われたように、それは彼らに「益」(16・7)をもたらすのである。わたしの兄弟たち なぜ弟子たちがイエスの兄弟であり得るのが続いて示される。わたしの父またあなた

がたの父：わたしの神またあなたがたの神 父なる神との関係において、イエスのそれ(三位一体における永遠の交わり)は、弟子たちのそれとは区別される。けれどもこの区別は「排斥」ではない。その正反對の「包含」がここにはある。すなわち御子のおかげで弟子たちは、本来ならそうは呼べないお方を「わが父、わが神」と呼ぶことができる者とされたのである。「主は、彼らを兄弟と呼ぶことを恥とされない」(ヘブル2・11)。そこに圧倒的な愛とゆるしがある。ルツ1・16「あなたの民はわたしの民、あなたの神はわたしの神です」を想起するかもしれない。ナオミとルツの間に新しい家族関係が結ばれたように、主が兄弟姉妹と呼んでくださる者同士も、新しく兄弟姉妹とされ、ここに教会という新しい家族が誕生する。ルツ記においては、ナオミの神のもとへ来ることを選んだのはルツであったのに対し、ここでは救い主の方から私たちの所へ来てくださり、その生涯と死、復活と昇天という一連の救いのわざを通して、私たちを神の民としてくださったのである。

参考図書 4月5日分と同じ。

聖書

創世記1・1-31

タイトル

天地を造られた神様

暗唱聖句

はじめに神は天と地とを創造された。

目 標

天地創造の神を信じる。

創世記1・1

導入

(和田牧子)

「この世界はどうやってできたんだろう?」「どうしてぼくはここににいるのかな?」みなさんは、そんなふうに考えたことはありませんか? とても大切な質問ですね。聖書は「神様がこの世界を造られたから、私たちはここに生きている」と教えています。私たちが遊んだり、勉強したり、何かを感じたりできるのも、神様がこの世界を、そして私たち人間を造ってくださったからなのです。私たちがこうして、この世界を造られた神様を知り、そのお方を礼拝できることは、ものすごくすばらしいことなんですよ。

はじめに神は

みなさんは工作するのは好きですか? 何かを作る
とき、必ず「材料」が必要ですよね。画用紙とか折り紙、

木や粘土などの材料が必要です。ところが「はじめに神は天と地とを創造され」ました。神様が、すばらしい天と地とを造られたのですが、それは何もないところから造られたのです。これは、神様にしかできないことです。それでは神様は、どのようにして天と地を造られたのでしょうか?

すべてはとも良かった!

まず神様は「光、あれ」とおっしゃいました。すると光ができました。それを見て、神様はとても満足な様子、光とやみとを区別されました。昼と夜ができて、一日目は終わりました。

次に「水は上下に分かれ、空と海になれ」と言われました。そのとおり、水が二つに分かれました。神さまは天空を天と名づけられました。二日目も終わりました。

次に「空の下の水は一つ所に集まり、かわいた地が現れよ」。こう神様が言われると、そのとおりになり、陸と海ができました。陸に草や木が生えるようお命じになると、そのとおりになりました。みなさんが大好きな果物や美しい花々も神様が造られたのですね。神様は心から満足なさいましたよ。こうして三日目が終わりました。

次に神様は「光る物が天の天空にあれ」と言われました。そのとおりになりました。昼に輝く太陽、そして夜に光る月ができたのです。他にも、数えきれないほどのうつくしい星が造られました。四日目は終わります。

神様がまた命じられると、海は魚やその他の生き物であふれ、空はあらゆる種類の鳥でいっぱいになりました。わくわくしてきますね！ 五日目が終わりました。

さらに神様が命じられると、地上に家畜やけものなど、あらゆる種類の動物が造られました。みなさんはどんな動物を知っていますか？ 牛さん？ 馬？ ぞうやキリンもいたのかな。

そして、とうとう最後です。神様はこうおっしゃったのです。「さあ、人間を造ろう。地と空と海のあらゆる生き物を治めさせるために、われわれに似た人間を造ろう。」人間が、天地を造られた神様に似た者として造られたのです。私たち人間、男性と女性は、すばらしい存在として、神様によつて造られたのです。ハレルヤですね。このように、六日間ですべてを造られた神様は、それらをごらんになって大変満足されました。「それは、はなはだ良かった」と書かれていますよ。

言葉によって創造された

気がつきましたか？ 神様はすべてを「言葉」によって造られました。神様の言葉によるならば、何でもできないことはないのです。神さまの言葉はとても大きな力を持っていることがわかります。こんなに不思議で大きな世界、そして人間を造つてくださったのですから。

この神様の言葉である「聖書」に学び、神様のお心を知れば知るほど、私たちの歩みも安全で、確かなものになるのは当然のことなのです。聖書のみ言葉は私たちに進むべき道を教え、私たちを励まし、罪に汚れた心を新しく造り変えることさえできるのです。

結び

世界のすべてを造られた神様が、あなたをも造られ、とつても愛してくださつて、すべてのことに関わつていてくださいます。あなたが起きている時も、眠っている時も、うっかり神様のことを忘れているような時も、神様はいつも共にいてくださり、決して見捨てたり、忘れたりなさいません。だから安心して神様を信頼して進んでいきましょう！

♪はじめに神が♪ (GS6)

聖書 創世記1・1～31 テーマ 天地創造

序論

(小泉 創)

聖書には世界の始まりから、完成までが描かれています。私たちの生きているこの時は、その間にあります。神が導いて来られた歴史の中に生かされている私たちにとって、神がどのように世界をはじめられたかを知ることとはとても大切なことです。

一、はじめに

宇宙に始まりがあることは科学の世界でも語られています。科学からのアプローチは、どのようにこの世界が形成されてきたかという現象を説明しようとするものです。それに対して聖書が教えることはこの世界がつくられた意味とそこにこめられた神の喜びです。子どもたちの自己評価が低くなっています。子どもたちには、あなたが愛され、価値ある存在なのだということを繰り返し伝えたいのです。天地創造の物語の中からも、神の愛の中で人が創造されたことを聞き取ることができます。

神は何もない所からこの世界を造られました。すべてのものはじまる以前からおられる神が、世界の根源です。すべてのものは愛なる神によつてはじめられました。無目的な偶然の産物などではありません。

二、すべてのものは造られたもの

神の言葉によりすべてのものが六日間で作られたと記されています。ここで受け止めるべきメッセージは、すべてのものを順序立ててつくられた神の秩序と、創造の冠、クライマックスとしての人間の創造です。そして真に礼拝を受けるべきお方は神だけだということです。どのような天体も動物も人も被造物に過ぎず、決して礼拝の対象にはなりません。古代より人は太陽や月、山や森を礼拝してきましたし、不思議な動物の姿に神秘を感じ、神の使いであるかのように考えることもありました。さらには人を神のように拝むこともしてきました。しかしそれらのものはすべて被造物にしかすぎません。礼拝を受け取るべきは唯一の造り主、神だけです。

三、はなはだ良かった

神は創造なさったものをごらんになって「よし」とお喜びになりました。グノーシス主義という異端は、霊は純粹だが、物質は汚らわしく憎むべきものであると教えます。汚れた世界を造った神はきよい神であるはずがなく、下級の存在なのだと教えます。しかしそれは違います。すべてのものは喜ぶべきものなのです。六日目には人の創造が終わりすべてをご覧になった神は「はなはだ良かった」と喜んでおられます。神はご自分のわざであるアダムとエバを喜ばれました。つまり私たちという存在も神によって喜ばれるものなのです。

しかしこの世界の状況、生きている人々の営みは、「はなはだ良かった」というところからはあまりにも遠く離れてしまっています。私たちも人から喜ばれていないように思うこともあったでしょうし、自分自身の目にもそのように見えるかもしれません。それは私たちが今いるこの世界に罪が入り込んで、本来の姿を損なってしまったからです。罪の起源については、再来週に学びますが、私たちの前には決して手放して喜ぶことのできない現実があります。

それでも神はこの世界も、私たちをも見捨てることをなさいません。愛によって創造され、その存在を喜ばれた私たちを、神は救い出し、この世界まるごと作り変えようとしておられます。ですから、「はなはだ良かった」という神の言葉をどんなときでも変わることなく、心にとめ続けましょう。

結論

神がわたしたちの存在を喜んでくださっていることを感謝します。唯一の神による素晴らしい創造のみわざを、子どもたちにも愛をもって伝え、共に神の素晴らしさをほめたたえましょう。

研究資料

(辻林和己)

創世記1・1～31、2・1～3は、「天地創造の由来」(2・4)が記されている。神が「6日間」の期間で天地のすべてを創造され、「第七日にその作業を終えられ」、「そのすべての創造のわざを終わって休まれた」(2・2～3)。神様がすべてを創造された創造主であり、宇宙、地球、生物、人間、そして私自身も偶然に出来た存在ではなく、神様が創造された被造物であることを伝えたい。

テキスト

1 はじめに 万物が存在し始める最初の時に、という意味。被造物の歴史の始まる決定的な時を示す。具体的には最初の創造から第6日の創造(31)までの期間を含んでいる。**神** 原語は(ヘ)エローヒム。原語では複数形。文法的には威厳、尊厳、卓越性を示す複数である。**天と地** 天にあるものと地にあるものすべて。**創造された**「創造する」(ヘ)バーラー)は一人称単数。旧約聖書では、この動詞の主語は常に神。神の創造するものは、「物」(イザヤ40・26)であるか、あるいは状況(イザヤ

45・7、8)である。

2 地 「天と地」(1)の「地」に焦点が合わせられる。創世記の記者は2～31節は「地」、すなわち地球に焦点を絞って神の創造のみわざを記述する。**形なく、むなしく**

(ヘ)トーフー・ヴァ・ボーファー) 原文は「形無く、無秩序な混沌とした状態」を意味する言葉が用いられている。**淵**(ヘ)テホーム)は「深淵」を意味する。新改訳では「大水」、新共同訳では「深淵」と訳されている。**おおっていた**「おおおう(ヘ)ラーハフ)」は母鳥が羽を広げてひなをおおう、という意味。神が見守っておられるイメージを伝える言葉が用いられている。

3 神は：言われた 原文では定型句の言葉が用いられている。創世記1章にはこの定型句が9回用いられている。**光あれ** 光そのものが神の創造の結果であることを示している。光の創造は、第4日における太陽の創造に先行している(16)。**4 神は：見て、良しとされた** この文も原文では定型句の言葉が用いられている。ここでは光の創造が神のみどころにかなうものであり、神がご覧になって満足されたという意味。

5 名づけられた 名は実質を表す。神の与えられた名

は本質の表現である。夕となり、また朝となった。第一日である 原文では「まず夕があり、それから朝があった。」という意味になる。一日の始まりは、夕方から始まると捉えられている。ユダヤ人たちの時間感覚が反映しているのかもしれない。

8 おおぞらを天と名づけられた ここでの「天」は1節の「天」とは意味が異なり、地から見上げる大空を意味する。

16 大きい光 「太陽」のこと。小さい光 「月」とのこと。

21 海の大いなる獣 ここで「獣」と訳されている原語(ヘタンニニム)は旧約聖書の他の個所では、「へび」(出エジプト7・9等)、「龍」(新改訳では「わに」)(エゼキエル29・3等)、と訳されている。ここでの「大いなる獣」は、「鯨」(ホエール)と訳されている英訳あり)のことではないかという説やカナン神話における海の竜神を連想させる「へび」か「わに」のことではないかという説等もある。創造し この節で1節以来初めて「創造する」という動詞が使われている。魚を含む水生動物と鳥類の創造が重大だということを示す表現かもしれない。

い。

24 家畜と、這うものと、地の獣 「這うもの」は爬虫類のみを指しているのではない。滑らかに動く、または這いながら動く様々な被造物のことも含んでいる。これら三種類の動物は、おおまかにいえば、家畜、小動物、狩猟動物のことであろう。

25 造られた ここでの「造る」は1節、21節の「創造する」という言葉とは原語でも違う言葉(ヘアーサー)が用いられている。この動詞は主語が神の場合も神以外の場合も旧約聖書の中で用いられている。

26 人を造り 原文を直訳すると「わたしたちは人を造ろう」。新改訳第3版は、「さあ人を造ろう」と訳されている。ここでの動詞は一人称複数形が使われている。その理由は神の威厳、尊厳を表す複数であるから、思案、熟慮を表す複数であるから、あるいは三位一体を暗示する位格の複数であるから等の説がある。人が創造される時が神の創造のクライマックスである。

参考図書 D・キドナー「創世記」『ティンデル聖書注解』(いのちのことば社)、松本任弘「創世記」『新実用聖書注解』(いのちのことば社) 他

聖書

創世記1・26～31

タイトル

人間を造られた神様

暗唱聖句

神は自分のかたちに人を創造された。

創世記1・27

目 標

神と共に歩むよう造られた者であること
を知り、神との交わりに生きる。

導入

(和田牧子)

先週のみ言葉を覚えていますか? 「はじめに神は天と地とを創造された」でしたね。一日目に造られたのは何だったでしょうか? そうですね。「光、あれ」と命じられて光ができました。それでは最後に造られたのは? わたしたち人間でしたね。今日は、わたしたち人間がどのようなものとして造られたのか、聖書から学びましょう。

神様のかたちに創造された

神様は言われました。「さあ、人をわれわれのかたちに、われわれに似ている姿に造ろう!」。実は神様の「私たち」って、外の顔かたちのことではないのです。人間の「なかみ」が、神様に似せて造られたということなのです。私たちのなかみが神様に似せて造られたなんて

びっくりしますね。

たとえば私たちは、人に親切にすることや、決められたルールを守ることが「良いこと」だってわかりますよね。人に意地悪をしたり、うそをついたりすることが「悪いこと」だともわかります。それは人間が、きよく正しい神様に似せて造られたからなのです。ある人は「うちの犬は何か良いことかわかるんだよ」と言います。でもその犬は何をしようと叱られるか、何をするか、褒美がもらえるかを知っているだけです。良いことと悪いことを分別しているわけではありません。

また、今朝「ふん! 教会学校になんて絶対に行くものか」って決めていたのに、勝手に足がトコトコ動いてここに來てしまったという人はいませんか。人間は、「こうしたい」「ああしたくない」と自由に自分で考え、やりたいことを選べるように造られたのです。

イルカなど、どんなに賢い動物でも、すてきな音楽を演奏したり、美しい絵を描いたりはできませんよね。そんな力も、神様に似せて造られた人間だけに与えられているのです。すばらしいことだし、うれしいことだと思いますか?

神様や人と交わるために

ではみなさんは、神様から与えられた能力や時間を、どんなふうに使っているでしょうか。神様は私たちと一緒にいたいと願ってくださり、私たちとお話したいと願ってくださっています。そんな私たちが神様と交わることなく生きているなら、その人のからだは生きていても、たましいは死んでいるのですね。私たちは朝起きた時から、夜寝るときまで、神様とお話しながら生活することができます。

ある男の子は言いました。「人間が神様によって造られたとは思わないな。人間はそこらへんの虫と同じだよ」。でもその男の子は大切なお友だちが亡くなってしまうとき、とても悲しく苦しく、自分を責めました。「どうして亡くなる前にもっと優しい言葉をかけてあげられなかったんだろう」。涙ながらにそう言いました。そのような、お友だちを想う気持ち、悲しむ気持ちこそ、神様に似たものとして造られた証拠ではないでしょうか。

私たちはお互いに心と心を通わせ、愛し合うことでこそ、生きていけるように造られました。神様は私たちを男と女とに造られ、お互いに励ましあい、助け合って生

きて行けるように造られたのです。

世界を治めるべき人間

それから神様は私たち人間に、とても大切なお仕事を下さいましたよ。それは神様が愛しておられるこの世界を大切にし、きちんと治めるお仕事です。神様は言われました。「われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造り、これに海の魚と、空の鳥と、家畜と、地のすべての這うものとを治めさせよう」。残念なことですが、世界中のあちらこちらで、美しい自然がめちやくちやくにこわされたり、人間同士が殺し合ったりしてきました。それは、人間が「自分さえよければいいんだ」という考えで生きてきたからなのです。自然を大切にし、人々を愛する姿こそ、神様に似せて造られた者の姿なのですね。

結び

神様はご自分が造られたすべてのものを見て「非常に良かった」と言われました。私たちを造ってくださった神様に「ありがとう」の気持ちで毎日お祈りし、賛美しましょう。神様はいつも私たちとともにいて、私たちをおしてすばらしいことをしてくださいます。

♪海と空つくられた主は♪(イン8)

聖書 創世記1・26～31 テーマ 人間の創造

序論

(小泉 創)

昨年、世界中で話題になった人物に、地球温暖化対策を訴える16歳のスウェーデンの少女、グレタ・トゥーンベリさんがいます。国連で各国の指導者たちを前に温暖化の対策に真剣に取り組んでほしいと、熱く語る様子は多くの人々の心を打ちました。日本でも毎年のように繰り返される大きな災害を思うと、確かに世界はバランスを崩していることを痛感します。神が造られた世界のスタートはどのようなものだったのでしょうか。

一、人は神のかたちにつくられた

人は他のすべての生き物と同じように神による被造物です。しかし人には他の被造物とは異なったところもあります。神が「われわれのかたち」に人をおつくりになつたと書かれてあるのです。人は単なる動物ではなく、神に似せられている存在です。それはもちろん目に見えるからだの形のことではありません。神のかたちとは、い

ろいろな解釈がありますが、人に与えられた心、魂に関わることであり、人の資質や能力を示しています。人に理性が与えられているのも、道徳的で、創造的なものも、社会性をもっているのも、そして何よりも神を求め、礼拝をささげることが出来る存在であるのも、神がそのようにおつくりくださったからです。人は思考し、選択し、創造し、愛し、礼拝します。そして神から、尊い者、価値ある者とみられている私たちなので、互いを尊い者、価値ある者とみなすべきなのです。

二、人に与えられた責任

神は生き物たちに、お命じになりました。「生めよ、ふえよ」(22)。しかし人にはさらにもう一つの命令が加えられています。「生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ。また海の魚と、空の鳥と、地に動くすべての生き物とを治めよ」(28)。人はこの世界と、そこに住む生き物たちとを治める役割が与えられています。それはよく誤解されるように、自然界を好き勝手に貪^{むさぼ}つてよいという意味ではありません。神のかたちにつくられた人間が、神が喜びになった世界を神の愛をもって治めるよ

うに命じられているのです。しかし多くの心ある人が嘆くように、人間のふくれ上がった欲望と無責任なふるまいによって、この世界は損なわれてきました。

三、神のかたちを取り戻すために

神のかたちとしてつくられたはずの人間が、なぜそれとは反対の生き方に進んでしまったのでしょうか。聖書は、神のかたちにつくられた人間が、罪によって損なわれてしまったと伝えていきます。そして人は自己中心的なものになってしまったというのです。治めるべきものを偶像として拝み、逆に支配されるようになりました。そして他の人の価値を軽んじるようになりました。

このように神のかたちがいびつになってしまった人間を神様はつくりかえよう、再創造しようとしておられます。

新約聖書には、キリストは神のかたちであると記されています。

「御子は、見えない神のかたちであって、すべての造られたものに先だって生れたかたである。」（コロサイ 1・15）

キリストを通して、罪ゆるされ神に立ち返った者は、キリストに似た者とされて、神のかたちを取り戻していきます。そして与えられた役割を果たすことを命じられるのです。

結論

神がお与えくださった世界を損なってしまったのは、人間の罪です。その世界の中で私たちも嘆いています。神は人をゆるし、神のかたちを取り戻させようとしておられます。神からまかされた責任を果たし、これからの世界をよく治めるために、次の時代をになう子どもたちと共に神の御許に立ち返りましょう。

研究資料

(辻林和己)

今回の個所は、第6日の創造(24～31)で人の創造が記されている。他の被造物とは違い、人間だけが特別に「神のかたちに創造された」存在である。今回は特に「神のかたち」とは何かを考えたい。

テキスト

26 われわれのかたち 「われわれ」と複数になっている理由は諸説がある。①神と天使たちのことである ②神の威光を表すため複数形が用いられている ③三位一体の神を暗示している、等。「かたち」は原語では(ヘ)ツエレム)。像、イメージ、かたどること、型に流し込むこと等の意味がある。われわれにかたどって 原文を直訳すると「わたしたちの似姿の通りに」。「似姿」は原語では(ヘ)デムース)。人を造り 「人」は原語では(ヘ)アダーム)。「土」(ヘ)アダーマー)との関連(創世記2・7参照)。ここでの「造る」は一人称複数形で「わたしたちは造ろう」という意味。治めさせよう 新改訳では「支配させよう」。神は人間が、被造物の一つ一つを本来の目的

果たせるよう治めることを願っておられる。

27 自分のかたちに…神のかたちに この文の中で「かたち」(ヘ)ツエレム)という言葉が「自分のかたちに」(ヘ)ベツアルモー)、「神のかたちに」(ヘ)ベツエレム・エロヒーム)と2回用いられていて、人が神のかたちに造られたことが強調されている。男と女とに創造された 人は誰でも男女の区別なくすべて神のかたちに造られている。主イエスは、この個所をマルコ10・6～7で、創世記2・24と一緒に引用され、結婚について語っておられる。結婚も含めて、男性と女性とは、それぞれがお互いを補完し合うパートナーである。

28 彼らを祝福して 神は、水の生き物、鳥(22)に続いて人間を祝福された。祝福することは賜物を与えるだけでなく、務めを授けることである。治めよ 男女それぞれが神の代理者として地を支配し治めるわざに参与するように命じられている。

29 あなたがたの食物 神は人間に植物を食物として与えられた。そして「命あるものには、食物としてすべての青草を与える」(30)と言われているように、直接にしろ間接にしろ、すべての動物が植物に依存していること

が示されている。この個所もすべてのものは神の御手によって養われていることを表している（後には、人間は、動物を食べることも許される。創世記9・3参照）。

31 はなはだ良かった 第6日目前半の創造までは「良しとされた」という表現であるが、この言葉は、神が創造のみわざの完成を非常に喜ばれたことを示している。

（参考）「神のかたち」について

「神のかたち」とは何か、は神学の上でも大きなテーマの一つである（A・マクグラス『キリスト教神学資料集 上』等参照）。

人間は、三位一体の神の交わりの中に招かれ、生かされている存在である。「われわれのかたちに」（26）の「われわれ」を右記の③と解釈するなら、人が神のかたちに造られているということは、人は神との交わり、他者との交わり（特に愛の交わり）に生きる存在とされているということである。

人が男と女に創造されたことそのものが、神のかたちに創造されたことであると解釈する20世紀の神学者もいる。また、ある日本の神学者は、「神のかたちとは、神が

願っておられるその人本来の（その人独自の個性を持つた）あるべき姿ではないか。」と言う。

J・ウェスレーは、「神の像（かたち）」を三重に区別する。それら三つは、人間以外の被造物を愛をもって配慮する存在として創造された政治的の神の像、神を知り、愛し、従うことのできる知的被造物として創造された自然的の神の像、そして、義と聖そのものである愛（神を愛し、人を愛する愛）が人間本性そのものとして創造された道徳的の神の像、である（清水光雄『ウェスレーの救済論』）。

「神のかたち」、あるいはそれに関連する語は、新約聖書にも記されている。「キリストは、神のかたちであられたが」（ピリピ2・6）、「御子は、見えない神のかたちであって」（コロサイ1・15）、「造り主のかたちに従って新しくされ」（コロサイ3・10）。人は罪によって、本来の「神のかたち」を失った（創世記3章）。しかし、キリストにより、人はその「神のかたち」が回復させられ、造り主の（神の）かたちに従って新しくされていく。

参考図書 4月19日分と同じ。

聖書

創世記2・15～17、3・1～7

タイトル

罪の始まり

暗唱聖句

善悪を知る木からは取って食べてはならない。それを取って食べると、きつと死ぬであろう。

創世記2・17

目標

罪が不信仰から生まれることを知り、み言葉に信頼し、従う者となる。

導入

(土屋開夫)

先々週は、主なる神様がこの天と地を造られたことを聖書から学びました。そして先週は、神様が人間を神様のかたちに造られたことを学びましたね。その時の世界はとっても素晴らしい幸せな世界でした。神様と人間が仲良く愛し合って、人間同士（アダムさんとエバさん）も仲良く愛し合っていました。

病気ありません。戦争ありません。恐いことも、悲しいことも、悪いものは何も無かったです。

生きること、死ぬこと

ところで皆さん、どういう時に人間は「幸せ」だと思

いますか？ それは「神様の愛のもとにいる時」です。

さつきも言ったように、私たち人間は造り主である神様から「命」を与えられました。「命の息」を吹き入れられたのです。私たちはこの神様と心が一緒にいれば、生かされ続けるのです。

という事は、逆に言うと、もし命の源である神様から心が離れてしまったら、人間は「命」を失うのです。体が死ぬだけでなく、心も霊も死にます。

お花や草に例えてみましょう。植物は土に植わっているれば長く生きる事が出来ます。土から命（水や養分）をもらうからです。でも土から引き抜いてしまったら、間もなく枯れてしまいますね。人間もそれに似ています。

善悪を知る木

だから神様は、アダムさんとエバさんにとっても大事な戒め・ルールを与えられました。「善悪を知る木からは取って食べてはならない。それを取って食べると、きつと死ぬであろう。」(17)と。

「善悪を知る」とは（色んな深い意味があると思いますが）、「自分で良し悪しを決める」という事だと思いますが、

す。「善か、悪か」「良いことか、悪いことか」を決めるのは神様です！ それなのに、人間が神様に聞きもしないで、自分勝手に「良し悪し」を決めるようになったら、どんどん間違った方向に行ってしまうでしょう。それはまさに「神様のもとから離れること」です！ そして「命を失うこと」です！

愛する人間が死んだら大変です。だから神様は、このルールを守りなさい、と命じられたのです。

誘惑

ところが、悪魔がへびの姿で誘惑してきました！ 気をつけて下さい。悪魔は今でも色んな姿で、子どもも大人も誘惑してきます。悪魔の狙いは、人間を神様から引き離すこと。そうして命を失わせることです。

まず悪魔は、友達のように親しげに近づいて来ます。そしてウソをつきます。神様は「取って食べると、きつと死ぬ」と言われたのに、悪魔は「決して死ぬことはないでしょう」とウソを言いました。

そして、エバさんが「善悪を知る木」の実を見ると、①ものすごく美味しそうで（肉の欲）、②とてもキレイな

色と形で（目の欲）、③食べたなら本当に賢くなりそうな（知識と高ぶりの欲）、特別な魅力がありました。

エバさんはどうしてもそれが欲しくなって、神様の言葉に背いても食べたくなり、遂に手を伸ばして食べ、そして自分だけでなくアダムさんにも食べさせました。

皆さんもそんな経験はありませんか？ 悪い事だと知りながら、どうしても欲しくて取ってしまったたり…。先生はあります。子どもの時、お友達の前で…。どうしても欲しくなって、盗んでしまった事があります。

神様に背くこと、神様から心が離れること、それが「罪」です。

結び

アダムさんとエバさんは罪の誘惑に負けました。でも、罪にも悪魔の誘惑にも勝った方がいます！ そう、イエス様です！ イエス様を信じ、イエス様についていけば、私たちはもう一度、神様の愛のもとに戻って、新しく生きることが出来るのです！

♪イエス様ごめんなさい♪ (PW14、イン33)

聖書 創世記2・15〜17、3・1〜7 テーマ 罪の始まり

序論

(小泉 創)

誰でも日々の出来事の中に、生きづらさを感じることもあるでしょう。私たちが生かされているこの世界は、愛なる神によって造られ、「はなはだ良かった」と言われた姿からはかけ離れていると感じます。なぜ世界はこのようなになってしまったのでしょうか。その原因が今日の聖書の個所で語られます。

一、神のいましめ

エデンの園で神は人に自由をお与えになりました。すべての木から心のおもむくままにとつて食べて良いといわれていました。ただ一つのいましめが与えられました。それは園の中央にある善悪を知る木からとつて食べてはならない、そうするならばと死ぬ、というものでした。すべてのものは神によって造られましたし、特に人は創造の冠として、神のいましめを守って生きるべき存在なのですから、神との関係を失って存在の意味を見

出すことはできません。神のいましめは自由を損なわせるものではありません。人は神への愛のゆえにその言葉を守りながら、心の底から自由を喜び味わうことができました。

二、へびの誘惑と罪

エデンの園での平和で喜びに満ちた日々は、へびの誘惑によって壊されました。ここで登場するへびは単に狡猾な動物ではありません。その背後からサタンが支配しているのです。へびはエバに近づき、狡猾に神の言葉をねじ曲げながら神への信頼を失わせていきました。神は意地が悪く、よいものを人に渡すことを拒んでおられる、善悪を知る木の実をあなたたちを神のようにさせるので禁じておられるのだ、と告げました。異なる神の姿をエバに教え込ませて、神のいましめに逆らわせたのです。

エバは欲望がかきたてられ神のいましめを破って、善悪を知る木の実を食べました。さらにはアダムにも手渡し、ともに神の約束にそむくものとなりました。真実の言葉を捨てて、偽りの言葉に従う者となったのです。そして生命の源である神を捨て、サタンが力をふるう世界

となりました。

三、神と人から離れて

罪の根源にあるのは、高ぶりです。神のようになりたい、神に従うのではなく自分がすべてを支配したい、という思いです。神のいましめの中にいるときは、アダムとエバも「裸であったが、恥ずかしいとは思わなかった」(2:24)という深い交わりがありました。罪におちいったときから、それは変わりました。彼らは、自分たちが裸であることがわかっていちじくの葉で身を隠すようになり(7)、神の顔を避けて、園の木の間に身を隠すようになりました(8)。罪は神と人との関係を破壊してしまします。サタンは高ぶる人々に神を拒ませ、互いに傷つけあい、神の造られた世界を破壊させようとしています。

しかし神は長い歴史の間、罪の中に落ち込んでいる人間に、「あなたはどこにいるのか」と語り続け、神のもとに立ち返るように求めて来られました。神を恐れて身を隠す罪人のもとに、御子が人として来てくださり、十字架におかかりくださるほどに愛してくださったのです。

自分では神のもとに帰ることのできない者を、命がけで救ってくださる神の愛の真実さ、恵みに感謝します。

結論

神のもとを離れたアダムとエバの姿は、私たち自身の罪の姿でもあります。しかし暗やみに住む私たちのために罪をゆるし、神を愛し、人を愛する者とされる道が与えられたことを感謝します。すべての人がこの恵みにあずかることができるように祈り求めましょう。

研究資料

(小平徳行)

神によって造られた人間が、どのようにして罪に堕ちたかについて記されている。

テキスト

16〜17 ここに神と人間との関係の本質が示されている。あなたは園のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい 園のどの木からでも「心のままに」その実を食べる事ができるとは、神に依存する人間に自由が与えられていることを示している。人間は自由に決断し、選択することのできる存在として造られた。しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない 同時に唯一の禁令が定められ、人間に与えられている自由が条件付けられている。この禁令が定められたのは、人間は神ではなく、神の命のもとにある一被造物であることをわきまえさせるためであろう。人間は神の戒めに従うという条件において自由である。神への従順こそが人間の真の自由の保証である。この禁令は、無数にあるあらゆる木のうち、たった一本の木だけを禁じるものであったので、決して厳しいものではなかった。また、この禁令が人間

だけに与えられたのは、人間が自由意志を有しており、良いこと悪いことを選ぶ道徳性を有する存在として造られたことを意味している。善悪を知る木 この木の実自体に不思議な力があり、人を死に至らせたり、善悪の知識を与える効力があるというのではない。善悪の知識は神の善悪の判断に由来する。人間は神への従順、不従順によって、具体的に善と悪を知る。「知る」(ヘヤード)は体験的な知識を意味する。神に従わずに、この木の実を食べるということは、本来、善悪の基準は神のものであるが、人間が神に代わって自分勝手に善悪の判断をし、自分の意のままに生きることを意味した。ゆえに人間がこの木の実を食べた時、神は「人はわれわれのひとりのようになり、善悪を知るものとなった」(3・22)と言われたのだらう。

1 ヘビ 神に造られた野の生き物であり、狡猾さが特徴である。ヘビそのものがサタンであるというよりは、背後においてサタンが、このヘビの狡猾さを利用していると見るべきであろう。どの木からも取って食べるなど、ほんとうに神が言われたのですか ここには人間に与えられた自由に対する神の制約を印象づけようとする狡猾

さが見える。本来はどの木からも食べてよいと、最大限の自由を与えられたものを、どの木からも食べてはならないと、神の言葉を改ざんし、最大限の制約に変え、神が人を束縛する存在であるかのような印象を与えている。

2～3 ここには神の言葉に対する女の受け止め方の揺らぎ、不正確さを見ることができ、**園の木の実を食べることは許されていますが** 神からの最大限の自由を、一応与えられている自由に変えてしまっている。これに**触れるな** これは神の禁令の中にはない。女が禁令に対して意識過剰になっていることを見る。**死んではいけないから** 神の言葉の不正確な引用である。「きつと死ぬ」「死ぬ」という動詞が二重に使われ、強調されており、「確かに、必ず死ぬ」という意味が込められている(2・17)を変えて、木の実を食べてもなお生きる可能性があることを無意識のうちにも認めようとしている。

4～5 **あなたがたは決して死ぬことはないでしょう** 神の言葉に対するサタンの断定的な否定。神の言葉に従わなくても大丈夫であると暗示することにより、神の絶対的な権威を否定している。**それを食べると、…神のよ**うに**善悪を知る者となることを**、神は知っておられるの

です サタンは、女に神の意図を意地悪なものと思わせ、神の愛と真実を疑わせようとしている。

6 **その木を見ると「見る」(ヘラーアー)**は、注意深く見ることを意味する。女はこの時、誘惑を避けることに失敗している。**食べるに良く、目には美しく、賢くなるには好ましい** この誘惑は、肉の欲、目の欲、誇りをかき立てるものであった。この感覚が神のみこころに方向付けられずに優先されるとき、罪を犯すことになる。**夫にも与えたので、彼も食べた** 夫は、女が食べないように止めるべきであったが、同調してしまった。彼が先立つて行なったことではなかったが、「アダムの変反」と言われることになる(ローマ5・14)。

7 **自分たちの裸であることがわかった** ヘビの言葉の通り、彼らの目は開かれたが、そこで知ったのは、自分たちが裸であることだった。**いちじくの葉をつづり合わせて、腰に巻いた** 神から離れた自分の中に絶対的な価値を見いだすことはできず、恥じて自分の姿を隠さずにはおれなかった。

参考図書 舟喜信「創世記」『新聖書注解・旧約I』、小畑進「創世記講録」(以上のちのことば社)、他

聖書

エペソ6・1〜4

タイトル

両親に従うことの意味

暗唱聖句

子たる者よ。主にあって両親に従いなさい。
エペソ6・1

目 標

主にあって両親に従う者となる。

導入

(和田牧子)

みなさんのお父さん、お母さんはどんな人ですか？
やさしい人？ ちょっと怖いかな？ おもしろい人？
お仕事を頑張ってくれている？ みなさんにとって、お
友だちに自慢できるような、ステキなお父さん、お母さ
んだったらいいですね。

主にあつて従おう！

今日のみ言葉は「子たる者よ。主にあって両親に従い
なさい」ですね。どうでしょうか。「はい、従います！」
と自信満々に言える人は、あまりいないかもしれません
ね。まだまだ眠たいのに「早く起きなさい！」と朝っぱ
らから怒られたり、「もう、あなただけは、どうしてお
兄ちゃんのようにできないの」なんて、兄弟と比べられ
たり…。結構親って、好き勝手なことをいうなーと思

ませんか？

そう、大人だって、親だって、本当に子どもの気持ち
がわかっていない時ばかりではありませんね。お母さんも
お仕事に遅れそうだから「早く、早く」とせかすのかも
しれないし、子どもの皆さんへの期待が大きすぎて、小
言が多くなるのかもしれない。

しかし注目してほしいことは、この聖書のみ言葉には
「主にあって」と書かれていることです。ただやみくも
にお父さん、お母さんに従うということではなく、まず
私たちと神様との関係が大切なのです。私たちを造
り、私たちを愛して、私たちを幸せにしたいと心から願っ
ておられる神様がおります。まずこの神様がおります
ことを信じること…。そこからすべてが始まります。

ひとり子を与えてくださった神様

私たちの心には、自分中心という罪があります。神様
よりも自分、他のお友だちや兄弟よりも自分、お父さん、
お母さんよりも自分という心を持っているのです。それ
が人間です。しかし、そのような罪に負けてしまう弱い
私たちを救うために、神様はひとり子であるイエスを
この世界にお送りくださいました。「神はそのひとり子

を賜わったほどに、この世を愛して下さった」と聖書に書いてあります。そしてその続きにはこうあります。「それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」。

私たちはその自分中心な罪のために、永遠の死へと進まなければならなかった者です。しかし、そんな悲惨な道に進まなくてよいように、天のお父様は大切なひとり子であるイエス様を十字架につけてくださいました。私たちが永遠の死ではなく、天国に行けるようにひとり子イエス様をお与えくださったのです。そのことによって私たちは、人間の愛などはおよびもつかないような大きな大きな天のお父様の愛を知ることができるのです。

私たちは自分の力では、お父さん、お母さんの言うことにいつも従ったり、尊敬したりすることはできません。しかし、この天のお父様の大きな愛を知るときに、うれしくて感謝でいっぱい、素直な心に変えられていきまします。また十字架の血によってきよめていただいた心で、お父さん、お母さんに従える人に変えられていくのです。すべては神様からのプレゼントなのですね。

親としての責任

また、今日の聖書箇所の後には「父たる者よ。子供をおこらせなさい：彼らを育てなさい」とあります。まずは両親がどんな人かが大切なのです。みなさんのお父さん、お母さんはやさしい人ですか？ お父さんやお母さんから愛が伝わってきますか？ たとえば何かのことで叱られても「自分のことを想って言ってくれてるんだな」とわかるなら、従えますね。でも意味もなくガミガミ怒ったり、小さな子どもを不安にさせるような親なら、それは親のほうに問題があります。お父さん、お母さんのほうこそ、子どもを怒らせないで、悲しませないで、愛をもって子どもを育てる責任を神様から与えられています。「こんなことを教会学校で教えてもらったよ」ってご両親と話してみるのもありかも！

最近子どもにもすごい暴力をふるったり、十分に子育てをしないような親がいます。毎日のように、そのような親が子どもを死なせてしまうニュースを聞きます。もしそのような心配なお友だちが近くにいたら、ぜひ教会学校の先生に相談してください。神様によってその子の命が、心が、生活が守られるように。

♪輝かせよ♪（イン87、PW41）

聖書 エペソ6・1〜4 テーマ 両親に従う

序論

(石田高保)

人間が最初に持つ人間関係は、親との関係です。特に乳幼児期に親との健全な人間関係を持つことは、基本的信頼感を養う上で極めて重要であることがわかってきています。この期間に受けた影響は、良かれ悪しかれ生涯に及ぶようです。昔の人もこのことに気づいており、それゆえ「三つ子の魂百までも」と表現したと思われます。

一、親を敬うことの祝福

「あなたの父と母とを敬え」、敬うとは、その人を重く見ることです。またこれには「おそれる」という意味もあります(レビ19・3)。神は子どもをこの世に送り出すためにその両親を用いられます。その意味において、両親にとって子どもが神からの賜物であるのと同様に、子どもにとっても両親は神からの賜物です。それゆえに両親はその性格と行状いかに関わらず、敬われなければならぬわけです。

「ながく生きながらえるであろう」、祝福の約束が伴っ

ています。実際問題としても、親の言葉によく従う子どもは、そうでない子どもに比べてより危険を避け、概して賢明な選択をし、心配はより少なく、その結果、長く生きる可能性が高いと言えます。また親に従うことを身に着けた子どもは、神に従うことを身に着けやすいです(箴言22・6)。ですからこのみ言葉は、単なる長生きを約束しているだけではなく、永遠の命を持つことまで約束していると言えます。父母を敬うこと、また親がそのように導くことは、子どもの信仰の継承に不可欠の要素です。単なる親孝行の勧めではありません。

ではこのみ言葉は、新約ではどのような反映されているでしょうか。主イエスは明らかに両親を敬い、彼らにお仕えになりました(ルカ2・51)。十字架の苦しみの中でも母マリヤへの配慮を忘れないませんでした(ヨハネ19・26〜27)。

二、親を敬えるように育てる

父と母を敬うようにとのみ言葉は、子どもが親を重んじて、従うように命じているわけですが、それに関連して、そのような子どもに育て導く責任はその親にあることも聖書は命じています。「父たる者よ。子供をおこら

せないで、主の薫陶と訓戒とによって、彼らを育てなさい、ここでの呼びかけが「母たる者よ」でないことに注意しましょう。聖書では子どもへの教育の第一の責任は父親であることが繰り返し明記されています。日本の生活史においても、母親が教育の責任を持つようになったのは、高度経済成長期からであるとも言われます。それは父親が家にいる時間が企業によって奪われるようになったことが主因であるといえます。それまでの日本社会は、原則として父親が家長として子どもたちの教育の責任を負っていたようです。それは聖書の価値観に通じるものです。ですからクリスチャンの父親は、自分の時間をやりくりして子どもの教育に関わることを考えてみたい。その場合の関わり方は、子どもを怒らせない、イライラさせない、つまりその子の主体性を重んじるということでしょう。親として無数の失敗を繰り返すかもしれないが、関わり方とすること自体が、子どもとのきずなを深めることになります。

また「主の薫陶と訓戒とによって、彼らを育てなさい」だから親が孤軍奮闘するのではなく、主が共に働いてくださり、主が育てて下さるという信仰に立つのです。親

にも教師にもできることは限られています。あとは子どもと主に任せるのです。その祝福はその子の生涯に及ぶ手ごたえのあるものです。「子をその行くべき道に従って教えよ、そうすれば年老いても、それを離れることがない」(箴言22・6) などはその代表的なみ言葉です。

これまで見てきたように、養育期間にある子どもは親を敬い、その指導に従うように言われています。しかし、いったん結婚するならば、「人はその父と母を離れて、妻と結び合い、一体となる」(創世記2・24) わけですから、第一にすべき人間関係は親から夫(妻) に変えることになります。配偶者を二の次にし、親子関係を優先させると夫婦関係に深刻な問題を引き起こすようです。聖書の原則ではないからです。それでも今日のみ言葉どおり、親への尊敬や交わり、援助などは保たれるべきです。

結論

子どもの時代に親をどう敬うか、あるいは敬わないかはその後の人生に強い影響を及ぼす重大な選択となります。ですから私たちは自分の子どもに、そしてCSの生徒に親を敬うことの大切さとその祝福を折々に語りたいのです。

研究資料

(金井由嗣)

はじめに

本日の個所は引用されている旧約聖書の個所も含めて主の命令であり、そのまま受け止めるべきものである。とはいえ、私たちの社会には両親を愛し敬うことが容易ではない子どもたちが多く存在することに配慮しなければならぬ。「両親を敬え」との戒めの意味について、最初に近藤由美『新・親との関係を見つめる』を読んでおくことを勧める。特に家庭に問題がない場合でも、思春期の生徒を導くには最良の本である。神様を中心にした家庭のあり方については、大嶋裕香『祈り合う家族になるために』をお勧めする。心に傷を負った子どもや扱いにくい子どもを理解して受け止めるためには、田中哲『見えませんが、子どもの心』、同『発達障害とその子「らしさ」』を読んでおくといい。

テキスト

1 子たる者よ 夫婦に対する命令(5・22〜33)と親に対する命令(6・4)との間に位置している。子ども

だけに従うことを命じているわけではない。親の命令がキリストの教えに反する場合、究極的にはキリストに従わなければならない。けれども、家族のそれぞれがキリストにあつてその責任を果たす家庭を築き上げることが主の命令の目的なのである(ブルース)。主にあつて(ギエン・キュリオ) エペソ書では一貫して「キリストにあつて」と同義語(ヘフナー)。命令の根拠は両親がどういう人であるかではなく、子ども自身とキリストとの関係にあることを教えている(コロ3・20参照)。これは正しいことである 接続詞(ギ)ガルを理由と取れば、「これは正しいことだからです」(新改訳)となる。あるいは強調と取って「これこそ正しいことなのです」と訳すこともできる。信仰者として、神との関係における正しさ(義)が、状況や感情に優先するのである。ヴィスロフは、家庭生活についての聖書の教えが「愛」に言及していないことに注目する。もちろん家族が愛し合うべきことは前提だが、具体的な生き方(倫理)の規準は感情ではなく主の命令におくべきなのである。

2 第一の戒め 人との関係における(十戒の「第二の板」の)第一と理解することも可能だが、後とつなげて

「約束を伴った戒めの最初」と解釈する方が適切である（新共同訳）。神の命令は神の民を祝福するためであり、戒めには約束が伴っている。律法全体を貫くこの大原則を示す「最初の」戒めが「父と母を敬え」なのである。

3 そうすれば、あなたは幸福になり、地上でながく生きながらえるであろう この約束は、両親を敬うことが個人的長寿をもたらすという呪術的・現世利益的な教えではない。神に「親として」召されて自分の誕生の直接の原因となった両親の存在に感謝し、「子として」の召しにおいて両親を敬い従うことが、与えられた人生を感謝して受容することの基礎であることを教えているのである（近藤）。また年長者を敬うことが習慣化した社会は、自分が高齢になった時に住みやすい社会であることは言うまでもない。

4 父たる者よ 「父」の複数形〔ギ〕パテレスは多くの場合、両親を意味する（ブルース）。父親だけでなく、母親もまたこの戒めの対象である。子どもたちへの戒めと親たちへの戒めがセットになっていることは、4節が接続詞〔ギ〕カイによって前と結びつけられていることから明らかである。子供をおこらせないで…育てなさい 原文で

は子どもに対する命令「敬いなさい」と対等の命令形となっている。両親にもまた、親として神の命令に従うべき責任がある。おこらせないで には、「怒らせる」〔ギ〕オルギゾーに接頭辞〔ギ〕バラがついた強調表現が用いられている。子どもを全く怒らせないようにすることは不可能（かつ教育上マイナス）だが、子どもを不当に扱うことによって感情の暴走を招くことがないようにせよ、と命じているのである。主の薰陶と訓戒とによって 子どもに対する命令が「主にあつて」とされていたように、両親も主（キリスト）との関係にもとづいて子どもに対する責任を果たすべきである。薰陶（ギ）パイディア）は教育を表す一般的な単語。訓戒（ギ）ヌーテシア）は「厳しく戒める」こと。子どもを教え導くことと厳しく叱ることは共に親の責任であり、それは「主がなされる」教育のわざを主から委託されて行う厳粛な責任なのである。

参考図書 上記の他、F・F・ブルース、F・フォールケス（ティンデル）、M・ロイドジョーンズ『子供をしつけることの意味』、小林和夫、C・F・ヴィスロフ『キリスト教倫理』、H. W. Hoehner (Baker)。

聖書

創世記3・6～19

タイトル

罪の結果

暗唱聖句

罪の支払う報酬は死である。

目 標

罪の結果の恐ろしさを知り、罪を悔い改める者となる。

□ーマ6・23

導入

(土屋開夫)

先々週のお話を覚えていますか？ 思い出してみま

しょう。主なる神様が造られた世界、それは最初、とても素晴らしく、幸せな世界でした。なぜ幸せだったのか？ それは神様の愛のもとに人間がいたからです。

その幸せがずっと続くために、神様は一つのルールを与えられました。それは「善悪を知る木からは取って食べてはならない。」というものでした。言い換えるなら「わたしの愛のもとにいなさい。わたしから離れてはならない。わたしの言葉を守りなさい」ということです。

罪の結果

では、この神様の大事な約束を破ったら、どうなってしまうのでしょうか？

こう言われています、「それを取って食べると、きっと死ぬであろう。」新改訳聖書だと「必ず死ぬ。」となっています。つまり、神様のみ言葉に背いて、神様から心が離れると、「ちよつと痛い目に会うよ」とか「苦しい思いをするよ」とかではなく、100パーセント、絶対必ず死ぬ、ということです！ なんと恐ろしい事でしょうか。

罪の症状

神様の言葉に背いたアダムさんとエバさんは、すぐに死んだわけではありませんでした。けれども、罪の力、罪の影響はどんどん現れてきました。

罪は病気に似ています。何かの病気になっても、スゲに死ぬわけではありません。けれども体のどこかが痛くなったり、元気がなくなったり、その症状はだんだん現れてきます。

アダムさんとエバさんもそうでした。今までは全く無かった、罪の影響が次々と現れてきました。

①自分を隠さないといけなくなりました。

今までは赤ちゃんや幼な子のように、自分のありのままを出しても何も恥ずかしくありませんでした。でも罪を犯してから、自分を隠したいと思うようになり

ました。

② 神様のことが恐くなりました。

今まで神様のことを「恐い」などと思ったことはありませんでした。神様のことが大好きだったのです。でも罪を犯した途端、神様のことが恐くなり、避ける（隠れる）ようになりました。神様との仲良しの関係が、壊れてしまったのです。

③ 罪を認めず（「ごめんなさい」を言わず）、他の人のせいにするようになりました。

「あの女のせいです」、「へびのせいです」、それどころか「神様のせいです」とさえ言いたそうでした。

④ そして、男の人も女の人も、人間は苦しんで生きる者となりました。

⑤ そして、やがて「土に帰る」「ちりに帰る」。つまり「死ぬ」のです。

⑥ それだけではありません。体が死ぬだけではなく、霊が死ぬのです。それはどういふことかと言うと、神様から完全に捨てられる、ということです！

何と恐ろしい事でしょうか。ローマ人への手紙 6・23 に「罪の支払う報酬は死である。」とある通りです。

証し

先生は子どもの頃、この事を考えたら本当に怖くなりました。「ボクの心はキレイじゃない。弟に意地悪したり、クラスの女の子を皆でいじめたり、お母さんに悪い言葉を言ったり。ボクは死んだら、絶対に地獄だ！」そう思って毎日泣いていました。ところが教会のおばさんが教えてくれました。ボクが地獄に行かないで済むために、イエス様が身代わりに十字架にかかって、神様から捨てられてくださったんだ、と。それを聞いて、暗闇に光が射した思いでした。そしてイエス様を信じて、5年生の時に洗礼を受けました。

まとめ

さっきの言葉には続きがあります。

「罪の支払う報酬は死である。しかし神の賜物は、わたしたちの主キリスト・イエスにおける永遠のいのちである。」

つまり、罪の結果は死ですが、イエス様を信じた結果は永遠のいのちなのです！ ハレルヤ！

♪主がついてれば♪（PW12、イン10）

聖書 創世記3・6・19 テーマ 罪の結果

序論

(石田高保)

創世記にはあらゆるものの始まりについて書かれています。宇宙の始まり、地球の始まり、自然の始まり、生命の始まり、人間の始まり、罪の始まり、救いの約束の始まり、家族の始まり、文明の始まり、言語の始まり、国々の始まり、イスラエル民族の始まりなどなど。ですから創世記は聖書の根であり、源流であり、土台であるということが言えるでしょう。創世記を調べるならば、現代社会の様々な要因が見えてきます。この世界には突発的にある出来事が起きるように見えますが、実は必ずその背景があります。歴史を持たずに何かが起こることは決してありません。古今東西、人間の考えることと為すことは本質において何も変わっていません。ですから創世記を学ぶということは現代の人間を見極め、社会を見抜くことができるのです。

一、罪の本質

創世記には罪の起源が記されています。なぜこの世に

は悪で満ちあふれているのか、その原因について究極的な答えを出した人はいません。なぜ家族関係がうまくいかないのか、なぜいさかいがあるのか、なぜ犯罪はなくなるのか、なぜ戦争は起きるのか、なぜ病気があるのか、なぜ災害が起きるのか、考えてゆくと世の中は不条理きわまる世界です。苦しみにあつた人は神がいるのらいつたい何をしているのか、ほんとうに神はいるのかという疑問さえ起こしかねません。しかし聖書以外にこの疑問に答えるものはないでしょう。きょうの箇所には罪がどのようにに始まり、それがどのようにに世界に影響を及ぼしたかについて記されています。

神はエデンの園に「善悪を知る木」を生やされました。この木から実を取って食べてはいけない、必ず死ぬからと禁じられていました。そもそも善悪を知る木とは、何が善で何が悪かを判断する基準のことを意味します。これは神の専権事項であり、大権です。神にとくべつ愛されている人間といえどもこれを犯すことは厳しく禁じられました。なぜなら人間が善悪の判断の基準を奪い取るならば、必ず自分本位の基準にすり替えてしまうことを神はご存じだったからです。罪を罪とせず、自分の欲望

のおもむくままに生きるようになることは目に見えていました。人間が自分で善悪の判断をするようになると、罪深い性質のゆえにたとえ悪い行いでもそれを良いものと自分勝手に判断するようになります。その結果は肉体的に死ぬ前に、霊において死んだ状態になります。神から離れ、その命から断ち切られ、自分の罪を刈り取りながら生きる状態です。こうして人間の社会には罪がはびこるようになってしまいました。

神は17節でアダムに善悪の知識の木から実をとって食べてはいけなと命じています。つまり取って食べることでできるように、何の囲いも設けていなかったわけです。彼の自由意思で食べることもできれば食べないでいることもできるようにしました。神は全能のゆえにアダムに罪を犯させないようにはできなかったのかという疑問がわきます。神が人間に自由意思を組み込んだために罪を犯す自由も犯さない自由も与えました。神は私たちが強制されてではなく、自由意思によって神の言葉を行うことを望んでいます。

二、罪のきつかけ

最初の人アダムが罪を犯す前に、妻のエバが罪を犯す

ようにへびすなわちサタンから誘惑されました。悪魔はへびを用いてエバを誘い込みます。なぜアダムではなくエバなのかは謎ですが、へびが善悪の木から取って食べるように巧みに誘惑しました。まず第1段階は、へびは神のことを疑わせます。神は善悪を知る木からは取って食べるなど言っただけなのに、蛇はすべての木から取って食べるなど言ったのかと神のことを歪めます。第2段階は、「きつと、死ぬ」(2・17)という神のことを全否定し、(決して死ぬことはない)と嘘を吹き込みます。第3段階は、神が自分の地位を脅かされるのを警戒しているから禁じているのだと思わせ、善悪を判断する基準を獲得して神のようになれると思わせました。こうしてエバはまんまとサタンの策略にはまり、アダムともども人類に罪を引き入れてしまいました。

結論

以上のように人間社会がなぜ罪であふれかえっているのかという疑問に対して、この箇所は明確に答えを出しています。この世で生きる限りだれひとり罪の影響から免れることはできませんが、イエス様の贖いの恵みの下でのみ罪の力に打ち勝つことができるのです。

研究資料

(加藤 満)

パゼット・ウィルクスは「この（創世記）第3章の記事が事実でないならば、全聖書は破壊されねばならぬ。」と記している。この個所は神話ではなく現実である。

人間は神の被造物であり、また喜びをもって神への従順な応答に生きるように、神によって、神のために創造された。しかし罪は、神に従い、応答することを拒むことを通して、被造物が有する適切な秩序を歪め、破壊する。自らが神の被造物であるという認識を歪め、それに背くことは、神との関係を歪めることに繋がる。神を喜び、讚美し、感謝し、従うという関係に自らが置かれていることへの拒絶である。

しかし神は人間との関係を、律法を通し明確に表現し、またイエス・キリストの贖いによって回復させ、今も永遠のいのちによって、神と共に生きる現実を与えて下さっている。罪の恐ろしさを覚えると同時に、究極的な勝利が既にあることを前提に扱いたい。

テキスト

6 その実を取って食べ エバは創造主ではなく被造物

に従い、教えられた教えではなく自分の印象に従った。そして自己実現を自分の目標にしている。しかし、人の生命線は物質的ではなく霊的なもの、つまり神の言葉に信仰的に応答することである。この生命線を断つことは死を意味する。

7 ふたりの目が開け ヘビの言葉は「あなたがたの目が開け、神のように善悪を知る者となること」(5)である。神のかたちとして造られたエバに神のようになることは必要ない。しかしこの言葉によって、エバは神から自らに賜った十分さを疑い、何かが未だ足りないという誤解し、既に十分見えているのに、より目が開かれるよう求め始める。しかし、目が開かれて見えたのは「自分たちの裸であること」(7)だけである。いちじくの葉をつくり合わせて、腰に巻いた裸であっても恥ずかしくなかったのが、腰の部分を覆うという恥の感覚に襲われている。人の使命であった「生めよ、ふえよ、地に満ちよ」(1・28)という神の言葉に従うことに、恥と情欲が伴うこととなった。

8 神の顔を避けて 「顔」は神の様々な性質を表現する。そこには裁きの神であり、同時にご自身を与えてま

で救いを成し遂げる愛の神の顔もある。しかし罪の結果、人は神の顔を避ける様になる。ヨハネ黙示録6・16と比較。対照としてヨハネ黙示録22・4を参照。

12 わたしと一緒にしてくださったあの女が 罪の結果、アダムはエバへの責任転嫁だけでなく、エバを与えた神へも責任転嫁している。「責任」は英語で「Responsibility」だが、これは「response」（応答する）、「ability」（能力）を意味し、神のかたちである人間の基本的な姿勢である。しかしここでアダムは、神の問いかけに応答せずに避け、代わりに自らを無力な被害者に仕立て上げている。

14 主なる神はへびに言われた へびへは問いかけがなく、判決だけである。へびへの呪いは、「おまえは腹で、這いあるき、一生、ちりを食べるであろう。」だが、これはそれまでへびに手足があったということを単に意味しない。むしろ、「地を這う」ことが呪いとしての象徴的な意味を持つようになった事を意味している。参照としてイザヤ65・25。

16 あなたは苦しんで子を産む これは出産に限らず、出産に至る女性の肉体的苦痛を示している。本来、神の

祝福であるはずの出産が常に苦しみの伴うものとなった。あなたは夫を慕い、彼はあなたを治めるであろう恋い慕うことへの応答が支配となっているのは、結婚の交わりが、統制の取れた感情の交わりから、本能的な衝動による交わりへと移ってしまった事を描いている。本来の結婚の祝福は、決して力の支配ではない。むしろ、神が定めたそれぞれの役割に従い、愛と尊敬の表される祝福ある関係である。

17 地はあなたのためにのろわれ 本来アダムは「地を従わせよ」（1・28）と、神の造られた世界への管理責任があったが、ここでアダムの罪の結果が、神が良しとされた土地にまで及んでしまっている。

18 いばらとあざみ 自滅した人間と神の裁きの情景を示している。例として怠け者の畑（箴言24・31）、滅ぼされた都（イザヤ34・13）。罪を犯し、神の秩序を失った人間は本来の世界を管理するという使命を果たすことが困難となった。

参考図書 D・キドナー『ティンデル聖書注解 創世記』、鍋谷堯爾『創世記を味わうⅣ』、W・ブルッゲマン『旧約聖書神学用語辞典』、他

聖書

創世記3・14～24

タイトル

イエスさまに救って頂こう！

暗唱聖句

主なる神は人とその妻とのために皮の着物造って、彼らに着せられた。

創世記3・21

目標

キリストによる救いを知り、救いを得る者となる。

導入

(飯田勝彦)

皆さんは暗い所は好きですか？ 今から10年前、南米チリで鉱山落盤事故がありました。33名の作業員が地下七百メートルの暗いところに約2ヶ月も閉じこめられてしまいました。その後、全員が助けられて、多くの人に喜びと感動を与えたのです。暗い所に閉じこめられた人たちの状況は、罪人である私たちと似ています。

アダムとエバが罪を犯したことで、私たちにも罪が入り、罪人となってしまいました。その結果、私たちは皆、深く恐ろしい罪の暗闇に閉じこめられてしまったのです。でも、神さまは私たちをその暗闇から救ってくださいるお方です。

悪魔を滅ぼす神様

アダムとエバは、神様との約束を破って、食べてはいけない木の実を食べてしまいました。それはどうしてでしょうか？ それは、ヘビがエバを誘惑したからでした。ヘビは、悪魔サタンです。悪魔は、神様や私たち人間同士の関係を壊そうと今も働いています。でも、この悪魔を神様はいつまでもそのままにしておく方ではありません。神様は、アダムとエバが罪を犯した後、直接、悪魔に言われました。「彼はおまえのかしらを砕き、おまえは彼のかかとを砕くであろう」と。神様は、悪魔を必ず滅ぼされることを約束されたのです。

愛される神様

皆さんは、嘘をついたり、嫌なことをしたりする友だちを好きになれますか。また、裏切った人に優しく話しかけたり、親切にしたりできますか。

アダムとエバは、神様の約束を破りました。彼らは、神様を裏切ったのです。そして、神様を恐れ、隠れてしまいました。裏切って隠れてしまった彼らを神様は、見捨てられたでしょうか。いいえ、そんなことはされませんでした。

神様は、裏切り隠れるアダムとエバを「あなたは、どこにいますか」と探されました。しかも、彼らに近づいて話しかけられたのです。それだけではありません。神様は、裸でいる彼らのためになんと、皮の服までプレゼントされたのです。どんな思いで彼らを探し、話しかけ、服までプレゼントされたのでしょうか。罪を犯して呪われてしまったアダムとエバでさえ、神様は愛されたのです。これと同じ愛で、今も神様は皆さんを愛しておられます。このことを是非、知ってください。

救ってくださいる神様

皆さんの家族や大切な友だちが病気になるたらどんな気持ちになりますか。「早く病気が治って欲しい」と思うでしょう。思うだけではなく、励ましの手紙やメールを送ったりしませんか。

神様は、皆さんを愛されています。だからこそ、罪の暗闇から早く救われて欲しいと願っておられます。神様は、その救いはるか昔から、そう、アダムとエバが罪を犯した時から約束してくださっていたのです。

アダムとエバに神様が皮の服とをプレゼントされました。皮の服を作るためには、動物が殺されなければなり

せん。愛である神様は、罪を犯した彼らのために動物の血を流されたのです。これは、イエス様が私たちの罪のために十字架で流された血のことを表しています。また、神様が、悪魔に「彼がお前の頭を砕くであろう」と言われました。この「彼」とは、イエス・キリストのことです。イエス様は、十字架で死なれました。しかし、死を撃ち破って三日目に復活されたのです。これが、神様が約束された悪魔の頭を砕くことだったのです。神様は、罪を犯して離れてしまった私たちを愛され、救うためにイエス様を与えてくださったのです。

まとめ

罪深い私たちは、決して自分の努力では救われません。もし、罪の暗闇にずっといるなら心は腐り、幸せに暮らすこともできないのです。でも、イエス様を救い主と信じるなら、罪の暗闇から脱出することができます。イエス様を信じて救われましょう！

♪主はわたしさえ♪ (ホ57)

聖書 創世記3・14～24 テーマ 救いの約束

序論

(石田高保)

創世記において天地創造に次ぐ大事件は、人間の墮落でしょう。墮落とは神の栄光をまつた最高の被造物である人間が、神に背くという大罪を犯したことによって、その栄光をはく奪され、霊と心とからだにおいて不完全、不自由、弱体化した者に転落したことです。そしてほんらい永遠に生きるものとして造られながら、神の命を断ち切られて死ぬものとなりました。

一、救いの計画

アダムとエバが禁じられていた善悪を知る木から取って食べることによって人類に罪が入り込みました。このとき「被造物が虚無に服した」のです(ローマ8・20)。世界のあらゆる自然や生き物が罪の影響を受けて創造当初の完全さと美が失われました。天変地異が起るようになり、弱肉強食の生態系となり、環境は悪化の一途をたどるようになりました。人間はと言えば罪を犯さないではいられない罪の性質(原罪)がアダムの子孫に脈々と

受け継がれることになりました。このことは創造の意図とは全く異なるものであり、予期されていたこととはいえ神様にとっては痛恨の極みだったと思われるます。

この一部始終を見ていた神様はアダムとエバに語りかけます。そしてアダムになぜ善悪を知る木から取って食べたのかと尋ねます。すると彼はエバのせいで食べたのだと答えます。同じ質問を投げかけられたエバはへびのせいだと答えます。すると神様はへびすなわちサタンを呪います。しかしその言葉の中に救い主を遣わして人類に救いの道を開くことが預言されています。(女のすえ)とは、エバの子孫ということがあり、救い主イエス様のことです。(おまえは彼のかかとを砕くであろう)、サタンがイエス様を十字架に追い詰め、死なしめることは、イエス様は復活するので致命傷になるどころか圧倒的な勝利を得るということです。いっぽう(彼はおまえのかしらを砕き)、イエス様はサタンに致命傷を与えるということです。救いが完成されるまでサタンは、人間に罪の赦される道はないこと、やがて死んでさばきを受けるほかはないと言って人間を脅し続けてきました。しかしイエス様が十字架にかかって死なれたとき、人類の

罪の問題を解決し、復活したとき死の問題を解決しました。これによってサタン脅しが全く根拠のないものであることが明白となり、彼の力は著しく削がれました。最高裁で無罪判決が出たら検察や原告は引き下がらなければならず、さらなる訴えは無効です。

二、救いの確かさ

だからといってサタンの知恵や能力が無力となったわけではありません。依然として人間を滅びへ巻き添えにしようと躍起になっています。私たちは彼の策略を見抜いて対抗しなければなりません。サタンと悪霊たちの帝国は健在です。しかし罪と死の問題による脅しは十字架と復活の事実の前には刃が立ちません。「神は、わたしたちを責めて不利におとしいる証書を、その規定もうともぬり消し、これを取り除いて、十字架につけてしまわれた」(コロサイ2・14)。一度でもイエス様を受け入れた人は思い出せないものまで一切の罪が赦され、神様から百パーセント受け入れられました。そしてクリスチャンとしての歩みの中で罪を犯したならイエス様の十字架に免じて赦され、まったく罪を犯したことのない者と認められます。しかしサタンはそんな簡単に神は赦すこと

はないとだまします。神は罪をしつかり覚えていて、いつか罰を下すと暗示をかけてきます。ですから何か悪いことが起こると、やはり自分の罪に対して罰が下ったのだと思ってしまうのです。しかし神様が赦して下さったのですから、自分を赦さなければなりません。

またサタンは死の問題で脅しをかけてきます。クリスチャンは救われたとき永遠の命をいただきました。それは文字どおり永遠ですから、当然生きている間も保証されているわけです。それにもかかわらず罪を犯しながら生きている自分は天国に入る資格がないのではないかと思う人もいます。そのようにサタンは巧みにつけいり天国の確信を揺さぶってくるのです。しかし私たちは行いではなく信仰によって神の国に入りました。そうであるならば行いではなく信仰によって天国に入るはずです。行いがどうであれ永遠の命が途切れることはありません。サタンの策略に対抗しましょう。

結論

罪の始まりは救いの始まりでもありました。救いの約束はイエス様の現れる何千年も前から繰り返し語られてきました。この約束されてきた救いに堅く立ちましょう。

研究資料

(加藤 満)

聖書觀の相違が最も顕著に表れる個所の一つが3・15であろう。聖書が互いに関係のない多くの断片の集成か、もしくは資料的な背景を持ちつつも、聖霊による統一的な有機的つながりをその本質とする書物であるのか。私達は後者の立場を取る。その為、この15節に「原福音」と呼ばれるキリストの贖いを読み取り、また中心聖句21節に神の贖いに関連する意味を見いだす。

バックストンは「創造と墮落」の説教で、「第一義的には、これはキリストと悪魔とを指します。御名の子孫は特にキリストを指す言葉です。この女から救い主が起ることが約束されました。そして、特に救い主がその戦いに勝利を得ることを約束されています。」と語り、キリストの贖いを見いだしている。また新改訳2017において、15節の脚注にイザヤ9・6、ガラテヤ4・4の参照が記され、このテキストと救い主の誕生の繋がりを示唆している事は注目すべきである。

テキスト

15 わたしは恨みをおく、おまえと女とのあいだに、お

まえのすえと女のすえとの間に 「わたしは恨み（新改

訳では敵意）をおく」はヘブル語では、文頭に置かれ強調されている。改めて、神がここでヘビへと敵意を置くとしているのは、この3章のテキストにおいて、既に人が敵意を誤った方向、即ち神に向けて敵意を向けてしまっていることに対する修正を意図している。神への敵意は破滅である。人間は神ではなく、罪とそれを導くサタンにこそ正しく敵意を持つべきであり、その方向の修正が神との関係の回復をもたらす。この個所では、第一義的にヘビに対して呪いが語られているが、新約においてヘビの背後にいるサタンの存在が記されている（ヨハネ黙示録12・9など）。また、ルターは創世記講解において、ここに神のサタンに対する勝利があるとして、「アダムとエバはこの約束の言葉によってどれほど励まされたことであろうか。彼らは神の回復の言葉に勇気づけられ、救いについてこの様に配慮してくださっていることを確信した。」と述べている。彼は**おまえのかしらを砕き、おまえは彼のかかとを砕くであろう** 「かしら」と「かかと」は対比されている。かしらを砕かれることは致命傷、または死を意味する。しかし、かかたと

かみつかることは、激しい苦痛を通るが、死を意味しない。フランシスコ会口語訳聖書の脚注に詳しい説明があるので、以下引用する。『女の子孫』は、エバの子孫である全人類と解する者が多い。もちろん『人の子』キリストを通じてのみ勝利が得られるので、間接的にキリストを指す。本節後半における対立（『彼』と『おまえ』）は二つの集合体の間のものではなく、悪魔と一人の人間、即ち『女の子孫』を指す単数代名詞との間のものである。したがって、『彼』は『やがて来る者』（49・10）、救い主キリストを直接に指す。」

17 地はあなたのためにのろわれ パウロはこの個所を念頭に、ローマ8・21の被造物の回復を記している。キリストの贖いは人間だけではなく、全被造物に及ぶ。

18 いばらとあざみ いばらとあざみは墮落後の人間が、神の被造物を管理する使命を如何に果たせなくなつたかを語る。しかし、本来人間が神の下に居続けたならば、用いたであろう支配について、イエスの自然界に対する奇跡は、何らかの示唆を与えている（ヘブル2・8、9）。

20 人はその妻の名をエバと名づけた 死の判決を受け

た後に、「いのち」という名は、「生きている」という語と語呂合わせしていて衝撃的である。この名前が母親としてのエバの役割と関係があるということは、アダムが15節の約束を、信仰をもって聞いたこと示している。

21 主なる神は人とその妻のために皮の着物を造って アダムとエバが最初に身につけたいちじくの葉の衣と対比されている。不完全で長持ちしないいちじくの葉に比べ、完全かつ耐久性に優れた衣。先ず神は人間にとって即時の必要を満たされた。また、彼らを覆う衣が神によつてのみ与えられるという象徴的意味合いも含まれる。また、神は人間にとって究極的な必要についても心を留めておられる。皮の衣が造られるために動物の犠牲があり、その犠牲の衣を着るという描写は、新約のキリストの十字架における犠牲と、それ故によりみがえられたキリストを着る者（ガラテヤ3・27、ローマ13・14）とされている私達の描写と重なっている。

参考図書 D・キドナー『ティンデル聖書注解 創世記』、鍋谷堯爾『創世記を味わうⅣ』、いのちのことば社『新聖書注解旧約1』、B・F・バックストン『バックストン著作集第5巻 創造と墮落』他。

聖書

使徒行伝2・1～11

タイトル
暗唱聖句

聖霊があなたにも降る（ペンテコステ）
一同は聖霊に満たされ、御霊が語らせる
ままに、いろいろの他国の言葉で語り出
した。
使徒2・4

目 標

聖霊に満たされ、造り変えられて生きる。

導入

（松浦みち子）

今日は「聖霊降臨日」です。約束の聖霊が降った日に世界で初めての教会が誕生しました。世界の宗教を調べると、キリスト教が一番多くて、次はイスラム教です。日本では仏教や神社が多くありますが、世界的にはキリスト教会が一番多くあるのです。キリスト教が全世界に宣べ伝えられてきた秘訣は为什么呢。

聖霊の約束を待ち望む

イエス様は、十字架で亡くなって三日目に復活されました。その後、四十日間、何度も弟子たちにあらわれて、「私は、死からよみがえりました」と多くの人にその事実を知らせ、神の国のことを語られました。そして四十日目に、「ただ、聖霊があなたがたにくる時、あなたがた

は力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう」と言い終ると大勢の人が見ている前で、オリブ山から天にお帰りになされたのです。

そのようなできごとの後、弟子たちはイエス様と一緒に食事をしているときに語られた約束を思い出しました。「あなたがたは、間もなく聖霊によって、バプテスマを授けられる」という約束であり、「エルサレムから離れないで、かねてわたしから聞いていた父の約束を待っているがよい」と命じられたことでした。

オリブ山から下ってきた弟子たちは、約束の聖霊を待つためにエルサレムの一室にあつまり、心を合わせて、ひたすらお祈りをしました。その数は百二十人ほどでした。その時、弟子たちは自分たちの中で誰が一番偉いか、と地位のことで争ったり、十字架につけられようとするイエス様を知らないと言ったりする者であったことを思い起こし、互いに悔い改めました。そして、自分たちはどんなに力のない弱い者であるかを身に沁みて感じ、約束の御霊が与えられることを待ち望みました。

五旬節のできごと

「五旬節」は、ギリシャ語で「ペンテコステ」といい、五十番目を意味します。この日は、過越しの祭りの後の最初の日曜日から五十日目にあたり、ユダヤ人は「七週の祭り」と呼んで、世界の各地から集まって小麦の初穂を神様にささげました。弟子たちもひたすらお祈りをしながらエルサレムに留まっていました。

五十日目のことです。いつものように弟子たちが集まって祈っていると、突然「ゴォーッ」と激しい風の吹いてくるような大きな音がして、家全体に響きわたりました。そして、舌のようなものが炎のように分かれて弟子たち一人ひとりの頭の上にとどまったのです。約束の聖霊が来て下さったのです。すると不思議なことに弟子たちは聖霊に満たされて、御霊の語らせるままにいろいろの他国の言葉で語り出したのです。

その物音を聞いて人々が集まってきました。「さっきの物音は何だ!」「何ごとが起ったのだ!」

次々と集まってきた人々はお祭りのために世界の各地から来ていた人たちでした。弟子たちがそれぞれ、自分たちの生まれ故郷の言葉で、イエス様のことを語るものですからビックリ仰天しました。「いったいどうしたん

だ!」と大騒ぎになりました。しかし、その中には「どうせお酒でも飲み過ぎて酔っぱらっているんだよ」と嘲笑う者もいました。

聖霊に満たされて

聖霊は、ご人格をもたれるまことの神様です。父なる神様、子なるイエス様、聖霊なる神様の三つにして一つなるお方です。これを三位一体の神様といいます。聖霊なる神様は信じる人の心を変えて下さる力あるお方です。この力は、ダイナマイトのようであるといわれます。ダイナマイトは、どんな固い岩や山でも粉々に砕いてしまいます。そのように、聖霊の力は働いて、ダイナマイトのように弟子たちを砕いて、一瞬のうちに全く新しく造り変えてしまったのです。弟子たちは、イエス様と寝食を共にしましたが、その心の中は、少しも変わっていませんでした。しかし、聖霊が一人ひとりに臨み、心の奥底からきよめ、いつでも、どこでも、喜んでイエス様のために命を捨てることのできる人に造り変えて下さったのです。イエス様の証人となるためには、どうしても聖霊に満たされることが必要ですね。

♪主にしたがうことは♪(こ改119、こ53、ホ87他)

聖書 使徒2・1～11 テーマ ペンテコステの恵み

序論

(大頭真一)

ペンテコステは、聖霊が弟子たちの上に降^{くだ}った日である。聖霊に満たされることは、私たちにどのような変化をもたらすのだろうか。

一、聖別

聖霊に満たされた後の弟子たちの生活についてルカは記す。①いっさいの物を共有。資産や持ち物を売っては、必要に応じて分け合った(44～45)。②心を一つにして、礼拝と聖餐^{せいさん}と賛美の日々を過ごし、すべての人に好意を持たれていた(46～47)。これはかつて主イエスが教えられた二つのいましめの成就であった。それは「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ」と「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」(マタイ22・37～39)。すなわち神と人へのまったき愛であり、これこそウェスレーが聖^{きよ}めの定義として好んで用いたものである。

まったき愛を現実に生き抜かれたのは主イエスご自身であった。だからまったき愛とは主イエスのように生きることである。けれども主イエスの生涯の果てには十字架の死があった。主のように生きるとは主のように死ぬことである。「進んで死なれた神にならう」ことがまったき愛であり、そのためには自分の命を神のために明け渡すしかない、現代のウェスレーアンであるキンローは述べている(『キリストのように生きる』)。

私たちにとって、このことは厳しすぎるように思われる。だが主の命令は私たちを束縛するためではなく、解放するためであることを忘れてはならない。神を知らず暗やみの中に生きていた私たちの罪ゆえに、主は十字架にかかってくださった。それは、私たちが自己中心の生き方から抜け出すためであって、主は罪と妥協をなさらない。御霊に満たされるときに、私たちはキリストの思いと心に生きることができる。そして、暗やみを憎み、神と人へまったき愛を注ぎだすのだ。

二、宣教

「そして主は、救われる者を日々仲間に加えて下さった」

たのである」(47)は聖霊に満たされることのもうひとつの結果を示す。このみ言葉が前述の44〜47節に続いているのは偶然ではない。宣教は聖さの実である。「聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて……わたしの証人となるであろう」とあるが、この力は人々をなぎ倒すような霊力といったものではないことに注意を要す。キリスト者の自分を投げ出す生き方を見て、このように人々はいったい何者だろうか、この世はいぶかしむのである。

宣教の動機もまた御霊によって与えられる。聖霊に満たされるときに救われない者は滅びるという真理が鮮やかになる。そのとき宣教は片手間ではできなくなり、私たちをとらえて離さない関心事となる。御霊は神の思いを教える。神が減んでしまったまじいに痛む、その痛みを知るときに、私たちは祈り宣べ伝えずにはおられなくなる。

宣教の能力もまた御霊によって与えられる。14節からのペテロの説教は旧約聖書を自在に用い、キリストの十字架と復活の福音を余すところなく語るものであった。その結果「その日、仲間に加わったものが三千人ほど」

(41) という大リバイバルが起こった。御霊は私たちにみ言葉を理解させ、語らせ、聞く者を揺り動かす。

ペテロたちが用いた「他国の言葉」は御霊の働きの本質を物語る。かつてバベルの塔を建てようとしたときに諸言語の間に壁ができた。御霊は今、その壁を越えてみ言葉を宣べ伝えさせた。人々はただ奇跡を見て信じたというのではない。そのとき人々は「心を刺され」て、「兄弟たちよ、わたしたちは、どうしたらよいのでしょうか」と救いを求めたのであった。

結論

すべてのキリスト者は聖霊に満たされて生きるようにと招かれている。それはキリスト者にとって選択可能なオプションではない。もし、私たちが聖霊の満たしを求めないならば、私たちの信仰はゆるやかな麻痺を始めるだろう。礼拝は形式的に、宣教はおざなりになり、この世への関心が神への愛にとつてかわるようになる。それは私たちにとって取りかえしのつかない損失である。そして、だれよりもそれを惜しまれるのは神である。

研究資料

(宮澤清志)

本日は聖霊降臨日（ペンテコステ）である。今週の目標は「聖霊に満たされ、造り変えられて生きる」である。私たちが新しく生まれ変わるのも、造りかえられるのも、聖霊によることである。そのことを本日の礼拝を通して確認したい。

テキスト

1 五旬節の日がきて この言葉は、大麦の収穫の初穂の束をささげてから50日目という意味である。すなわち過ぎ越しの祭の後の最初の日曜日から数えて50日目に祝われる祭りであることからこの名がある。また「きて」という言葉には、単なる日の流れという意味よりもむしろ、決定的な時の充滿によって起こる出来事が到来したという意味を含んでいる（ガラテヤ4・4参照）。すなわち聖霊降臨の約束（1・4・5、8）が成就されるまでの期間が満了し、預言の成就の日が来た、という決定的な出来事の到来を意味する **みんなの者** 120名ばかり（1・15）のことと思われる。しかし、中にはいわゆる「使徒集団」という説もある。一緒に 原始教会の理想的な

一致団結ぶりを示す使徒行伝特有の言葉（1・15、2・44他）。この言葉は詩篇133・1にも現れており、使徒行伝以前には、この語は「集会」や「共同体」との関連において用いられている。

2・4 これらの節に記述されている、聖霊の降臨の外的なしるしが史実であったかどうかと問うことは、恐らく無意味であろう。激しい風も、炎の舌も、一つのしるしとしてとらえる考え方が一般的である。しかし、だからといってこの箇所をただで片づけてしまうことは、この節の持っている真の意味を薄めかねない。つまり聖霊の満たしとは、結果として外面的な、目に見えるしるしが伴う、ということである。聖霊に満たされるとは、主観的な自らの内的経験であると同時に、客観的な他の人からもそのように見える経験として現される。なお、「風」「炎のような舌」「現れ」は、旧約では具象的な神顕現を表す。「風」とはその同義語である「霊」の降臨を表し、「舌」は「言葉」「異言」とその同義語である「言語」を表している。なお、この「炎」と「舌」は、主語を「炎」（単数）にするか「舌」（複数）にするかでその解釈が分かれている。

2 突然 驚くべき天来の超自然的な現象を印象づける語。続く「天から」の「音」という言葉と共に、この出来事が神の直接的働きの事件であることを描写している。

5～8 聖霊降臨の出来事に対する群衆の驚きが記される。4節までの出来事を聞いて、集まってきたのは、七週の祭りを祝うためにエルサレムに集まってきた信仰深いユダヤ人たちであった。「信仰深い」という言葉はユダヤ人に対してのみ用いられており（他にシメオンとアナニヤ、それにステパノを葬ったユダヤ人）、この奇跡は、彼らが証人となった事実を明確に記している。

また、物音 については、激しい風が吹いてきたような音 か、もしくは 聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、いろいろの他国の言葉で語り出した 声か、はつきりしない。しかし、文脈から考えて、他国の言葉で話し出した声は有力ではないかと考えられる。それによって、自らの生まれ故郷の言葉を聞いた信仰深いユダヤ人たちの「驚き」「怪しみ」すなわちあつけに取られた様子をさらに際立たせている。驚き とは、心を奪われるほどの大きな驚きであり、我を失ったというほどの大きな

驚きを意味する。また 怪しんで とは、非常に広い意味範囲をもつ言葉であるが、いずれにしてもその奇跡に立ち会った人々の尋常ならざる驚きが記される。

9～11 この地名のリストについては、辞典などで調べて頂くことが望ましい。パルテヤ人、メジャ人、エラム人もおれば、メソポタミヤ とは、ユダヤの東方の地方の名称であり、カパドキヤ、ポントとアジア、フルギヤとパンフリヤ とは、ユダヤから見て北西にある、いわゆる小アジア地方にある都市の地名である。またこれらの地方から見て南西側にある都市が エジプトとクレネに近いリビヤ地方 であり、そこから遠く離れて西側にある地方が ローマ である。このローマだけが唯一ヨーロッパ本土の地名であることは興味深い。また、人種からいえば、ユダヤ人と改宗者 とあるように、天下のあらゆる国々から 来ていた人々であった。なお、改宗者 とは、異邦人でありながらユダヤ教に改宗した人々のことである。

参考図書 榊原康夫『使徒の働き 上巻』（いのちのことば社）、F・F・ブルース『使徒行伝』（聖書図書刊行会）他

聖書

マタイ5・1〜12

タイトル
暗唱聖句

本当に幸せな人とは？
 こちらの貧しい人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである。

マタイ5・3

目 標

真に幸いな生涯の秘訣を知る。

導入

(松浦みち子)

あるテレビのコマーシャルで「幸せって何だっけ、何だっけ」と歌っていましたが、胸に手を当てる私たちも「何だっけ」と一緒に考えてみませんか？ みなさんはどんな時に「うれしいなあ、しあわせだなあ」と思いますか？ お誕生日に欲しかった素敵なプレゼントをもらった時、テストで100点をとってお母さんに褒められた時、家族で海外に旅行した時など、いろいろあるでしょう。確かに、やったーって、最高に幸せな気持ちになりますね。でも、そんなに最高の幸せも時間がたつといつのまにかなくなってしまういませんか？ いつまでもなくならない幸せってあるのでしょうか。

山王の説教

イエス様はある時、山に登って弟子たちにお話しをされました。イエス様はそのお話しの中で「さいわいである」と9回も語っておられます。これを3つに分けることができます。一つ目は「心の貧しい人」「悲しんでいる人」「柔和な人」、二つ目は「義に飢えかわいている人」「あわれみ深い人」「心の清い人」、三つ目は「平和をつくり出す人」「義のために迫害されてきた人」「わたしのためにののしられたり、迫害されたり、悪口を言われたりする人」、これらをみな、さいわいだと語られたのです。

「えー、どうして？」だって、豊かで大きな家に住み、たくさんのお金で何でも買える人、丈夫な体で元気に何でもできる人、そっちの方がぜったい幸せに決まってる！と、私たちは思いますね。けれども、お金は使えばいつかはなくなってしまうし、どんなに良い物でも時間がたつと変わってしまう。丈夫な体もいつか年をとって弱ってしまいます。

ホンモノの幸せとは？

「こちらの貧しい人たちは、さいわいである」とイエス様はおっしゃいましたが、「絶対貧しいより豊かなほうが幸せだと思うんだけど…」と、疑問に思いますね。

イエス様の語られたたとえ話からこのことを考えてみましょう。

ふたりの人が祈るために、宮にのぼって行きました。ひとはパリサイ人であり、もうひとは取税人でした。パリサイ人は常日頃から、神様の律法を守って規律正しい生活をして、自分は義人だと思い込んで、他の人を見下げていました。いっぽう取税人は、ときには税金をごまかして自分のふところに入れてしまうようなこともあり、誘惑に負けてしまったことを後悔するような日々を過ごしていました。

宮に入ったパリサイ人は胸を張って、人に聞こえるように大きな声で祈りました。「神様、わたしは他の人たちのような貪欲な者、不正な者、姦淫をする者ではなく、また、この取税人のような人間でもないことを感謝します。わたしは一週に二度は必ず断食をし、全収入の十分の一もきちんと献金しています」と。

もう一人の取税人はどうでしょう。宮の隅の遠く離れたところで立ち、目を伏せ、悲しみのあまり胸をたたきながら、「神様、罪人のわたしをおゆるしください」と、うめくように祈りました。この二人に対してイエス様は、次のよ

うに言われました。「神に義とされて自分の家に帰ったのは、この取税人であって、あのパリサイ人ではなかった。おおよそ、自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるであろう」(ルカ18・9～14)。

ホンモノの幸せに生きよう

「心の貧しい人」とは、自分を低くする者のことです。自分は罪深く、誘惑に負けやすい弱い者であることを知っている人のことです。なぜ、このような人が幸せかというと、自分の力ではどうしようもないとわかって「神様、助けて下さい」と神様に寄りすがって祈るからです。神様は、こういう人に知らんぷりをされません。必ず祈りにこたえて、罪をゆるし、心に平安を与えて慰め励ましてくださいます。神様と共に歩む日々ほど平安でしあわせなことはありません。だから、イエス様は「心の貧しい人たちは、さいわいである。天国は彼らのものである」と教えてくださったのです。いつまでも変わらないホンモノのしあわせは、天国の約束に裏付けられたものです。謙虚な心をもって神様に従い、ホンモノのしあわせに生きるものとなりましょう。

♪イエスさまにまさる♪(ホ65)

聖書 マタイ5・1～12

テーマ さいわいな人

序論

(高橋頼男)

幸いを求めない人はいません。誰もが幸いになりたいと願い、自分の思い描く幸いを得るために懸命です。今日まで著名な「幸福論」がいくつも世に出て、人間の幸福について論じられ、問われてきました。旧約聖書の詩編にも有名な幸い論が出てきます(詩篇1・1、詩篇32・1～2)。

ここにはイエス・キリストの幸い論があります。しかし、主イエスの幸い論は、万民に語りかける教訓や垂訓、教えの類いではありません、それは明確な説教なのです。イエス様は、ここで〈弟子たち〉と〈群衆〉に向かって八つの幸いについて語っておられます。イエス様の幸福論はまことにユニークです。人が考える幸い、この世の期待する幸いとは全く違っており、まさに真逆をいくものです。世の基準ではとても測れず、むしろ不幸と思われることが幸いのしるしであるかのようなのです。その理由は、主はこの世ではなく神の国の幸い、神の国の民とされた者の幸いを語っておられるからです。それは人間的幸福(幸福感・満

足感)ではなく、神による祝福です。この幸いは主の弟子たちへの説教として語られています。神の国に生きる彼らの幸いがあるかが語られています。また、主は群衆に向かって語っておられます。真の幸いについて改めて問い直し、深く考え、日ごろ漠然と考えている幸いがいかにもろく根拠の乏しいものであるかということに気付かせ、彼らの目を開き、神の国の価値観、人生観、世界観へと導くための説教なのです。

一、心の貧しい者の幸い(3)

最初に出て来る幸いは、心の貧しい者の幸いです。心の貧しさの幸いは、主イエスの語られる幸いの原型です。まず、心の貧しい者こそ幸いな人なのです。愛の無い、自己中心な人というのではなく、むしろ神の前にへりくだった心砕かれた人のことです。他の一切のものによらず、神のみに依存し神に信頼する人です。なぜ、「心の貧しい者」が幸せなのでしょう。それは天の御国が、すでにその人のものになっているからです。「天の国」、「神の国」とは支配や統治、主権のことを意味し、その支配や統治が及ぶ領土、国をさします。「神の国」はすなわち、神による支配、統治のことです。砕かれた心でへりくだって神に全く信頼して

いる〈こころの貧しい人〉は、すでに神による恵みのご支配の中に生かされているのです。

二、悲しむ者、柔和な者、義に飢えかわく者、あわれみ深い者、心の清い者、平和を作る者の幸い(4～9)

悲しむ者がなぜ幸いなのでしょう。それは真摯に自分の罪を神の前に認め、嘆き悲しむ者を、神は必ず豊かに慰めてくださるからです。「神のみこころに添うた悲しみは、悔いのない救を得させる悔改めに導き」(Ⅱコリント7・10)ます。柔和な者がなぜ幸いなのでしょう。それは耐え忍ぶことによって、〈地を受けつぐ〉すなわち、神の約束と賜物を得ることができ、御子の御姿に似た者とされるからです(ローマ8・29)。義に飢え渴く者がなぜ幸いなのでしょう。それは、神との正しい関係をひたすら求める者を、神は必ず義と認め、神のみ心になう歩みができるようにしてくださるからです。あわれみ深い人たちは神の義に生き、他者へのあわれみを大切にする人たちです。こころの清い者たちは、神に対して二心のない者たちです。平和を造る者たちは、神との平和によって、人との関係において平和を作り出す人たちです。シャロームを生み出す者たちで、彼

らこそ神の子と呼ばれるのです。

三、迫害される者の幸い(10～12)

主イエスは、〈義のために迫害されてきた人たちは、さいわい〉だと言われ、〈喜び、よろこべ〉とまで言われます。神に従う者が苦しみと迫害を経験することは当然のことなのです。しかも、そのことを喜びなさいと言われます。それは、苦難こそ神に従う者のしるしであり、神の国(神のご支配)がその人のものになっている証拠なのだからです。さらに、その時私たちは「地の塩、世の光」(13～14)としての使命を果たすことが出来るのです。そして、〈天においてあなたがたの受ける報いは大きい〉と断言していただきます。だから大いに喜ぶことができるのです。

結論

「なんと幸いな人たちでしょう、あなたがたは…」と言われる主イエスのことばは、この世ではなく神の国の幸い、神の国の民とされた者の幸いを語っておられます。神の国に生きる者とされている幸いを知り、恵みによって積極的にこの幸いに生きる者とされましょう。

研究資料

(宮澤清志)

テキスト

1 群衆 マタイ4・25に描かれた「おびただしい群衆」を指すものと思われる。イエスは、弟子たちばかりでなく、イエスに近寄ってくる群衆たちにも同じように神の言葉を語られた。山 この群衆を見て、イエスがなぜ「山」に登られたのかは記されていない。しかし、イエスにとって「山」とは、その節目節目において登場する重要な場所である(マタイ4・8、14・23、15・29、17・1、28・16他)。

3 12 ここに、本日の主題である「幸いの道」が示される。さいわい(ギ)マカリオスとは、単なる「幸せ」という意味とは異なる。この言葉は「神に祝福されている」という意味の言葉であり、それは、時間の変化、状況の変化などによって消滅したり薄められたりする類の幸福ではなく、何によっても消されることがなく、またこの世の何によっても取り去られることのない神の祝福の事実である。また、この個所は、一般に「八福の教え」とも呼ばれている(11、12節を入れると9つある)。しか

し、この「幸い」は、それぞれが切り離されて存在するのではなく、一つの「幸い」に見られる八つの側面という方がよりふさわしい。

3 こころの貧しい人たち この「貧しい」とは、徹底的に貧しい人のことをいう。「心の碎けた者」「たましいの悔いぐずおれた者」(詩篇34・18)に近い状態である。自分の内側により頼むべき何物をももっていない者のことである。このような者をこそ、神はご自分の民として迎え入れられるのである。

4 悲しんでいる人たち ここでは、何を、どう悲しんでいるのかは説明されていない。しかし、聖書に示される「悲しみ」とは、「この世が神を失っていること」に起源を発している。神に反逆しているこの世界や、罪に沈んでいる人間に対する「悲しみ」である。このような者たちに必要なものは「慰め^{なぐさ}」である。

5 柔和な人たち この言葉は、詩篇37・11の七十人訳聖書からの引用であるが、この詩篇では、柔和な人の特徴をいくつかあげている(怒りをやめ、憤りを捨てること。耐え忍ぶこと。主を待ち望むこと。等)。何よりも主イエスこそが「柔和なおかた」と呼ばれている(マタ

イ21・5)。そのような者たちに用意されているのは「新しい地」(Ⅱペテロ3・13等)である。

6 義に飢えかわいている人たち 義とは、神のご性質の中心をなす言葉であり、神が人のために備えられたものでもある。「救い」と置き換えてもいい言葉でもある。ここで、義に飢えかわくとは、神がキリストを通して人間に備えられる救いを熱心に求める人のことである。神はそのような人に救いを満たしてくださるのである。

7 あわれみ深い人たち あわれみとは「はらわたまで痛んで下さる神の愛」であって、他の人に対する具体的な行動へとつながる愛である。単なる同情や感傷ではなく、行動を伴うのである。そのようなあわれみをもって隣人に接する者は、あわれみを受けるのである。

8 心の清い人たち 「清い」という言葉は混じりけがないという意味を持つ。人間の最も奥深い部分まで純粹であることをさす。同時に「清い」とは「分かれたれない」という意味も併せ持つ言葉であり、「二心」でないことを指す(ヤコブ4・8)。そのような者に与えられた約束は「神を見る」であって、直接神とお会いするという約束である(Ⅰコリント13・12)。

9 平和をつくり出す人たち 平和とは「すべての被造物が、創造者との関係およびお互いの関係において、それぞれにふさわしい位置におかれること」である。人は、イエス・キリストを通して与えられる神の和解を受け入れ、和解の福音を携えて積極的に遣わされるのである(Ⅱコリント5・20)。

10 義のために迫害されてきた人たち 「義」とは、神が御国の民のために備えられた救いのみ業を指す。ペテロも「万一義のために苦しむようなことがあっても、あなたがたはさいわいである」(Ⅰペテロ3・14)と語っている。神はそのような人たちに、神の御国を約束されているのである。

11・12 この箇所は10節の展開である。特に、これまで「彼らは」と三人称で述べられていたものが、この節では「あなたがたは」と二人称となっており、弟子たちがやがて「ののしり」「迫害」「悪口」に直面するであろうことを率直に述べる。しかもそれは「わたし(キリスト)のため」(11)のものである。

参考図書 中沢啓介「マタイの福音書註解」(恵友書房)、D・M・ロイドジョンス「山上の説教」(いのちのことは社)

聖書

マタイ6・25〜34

タイトル

神さまを信頼しよう。

野の花がどうして育っているか、考えて見るがよい。

マタイ6・28

目標

必要を供えてくださる神を信頼し、心配しないで生きる。

導入

(飯田勝彦)

皆さんは思いわずらいやすいタイプですか？ 心に思いわずらいがあると、気持ちが悪くなりますね。今朝、イエス様は「思いわずらうな」と言われます。

思いわずらう私たち

皆さんは今、何か思いわずらっていることがありますか？ 来週の天気のこと。勉強のこと。学校での友達関係のこと。自分の将来のこと。家族のこと。自分の健康のこと。好きな人のこと等々。あげると切りがないと思います。思いわずらいがあると、それが頭の中にくるくる回り、目の前のことが手に付かなくなることもあります。時には何もしていないのに、思いわずらいで気持ち

や体が疲れてしまうことがあります。イエス様は「思いわずらうな」と言われます。「イエス様、そう言われても思いわずらってしまいますよ！」と言いたくなるでしょう。そうです！ 私たちは弱く思いわずらってしまいやすい者であることを認めましょう。それは開き直りやあきらめではなく、自分のありのままの姿を受け止めることです。その時はじめて「イエス様、思いわずらってしまいますが、どうしたら良いですか？」とイエス様に祈ることが出来ます。

備えてくださる神さま

思いわずらっているとき、友だちから「思いわずらわなくても良いんだよ」と言われ、「その理由は？」と聞くと、「思いわずらうだけ損だから」と言われたらどう思いますか？ 理由が分からないのに「思いわずらうな！」と言われても、ピンと来ないですよ。イエス様は思いわずらわなくてもよい理由を自然界の営みを通して教えてくださいました。自然は神さまが造られたもので、神さまの大きな御手の中にあります。ある方が「自然は第二の聖書だ」と言いましたが、自然を通して神さまの素

晴らしい恵みを知ることができます。イエス様はまず「空の鳥を見なさい」と言われます。鳥は自分で種もまかず、刈り取りもせず、倉におさめることもしません。でも、神さまはちゃんと鳥たちを養っておられます。6月には綺麗な草花が生き生きと咲いています。イエス様はこの草花にも目を向けられ、神さまが草花を綺麗に装ってくださるのです。空の鳥も野の草花さえも神さまはしっかりと養ってくださっているのです。そうであるなら、神さまが愛して止まない私たちを養って下さらないはずはありません。また、神さまは私たちの必要をすべて備えてくださる方です。

皆さんのこれまでの生活を振り返ってみてください。一週間、何も食わずに生活したことがありましたか？着る服がなくなつたことはありませんか？勉強が分かんなくなつたとき、誰かに教えてもらったことはありませんか？体調が悪くなつたり怪我をしたりして、病院で治してもらつたことがあるでしょう。あなたを愛される神さまは、あなたのすべての必要を知っておられ、必要なときに必要なものを備えてくださるのです。

神さまを信頼して歩む

神さまは、私たちがいろいろなことで思いわずらうてしまうことをよくご存知です。「何度いったら分かるんだ！思いわずらうて言つただろう！」と、責めるお方ではありません。思いわずらうたときに「ほら、空の鳥や野の花を見てみなさい。これらを養い装っているわたしが、あなたの必要なものも備えているよ。思いわずらうことなく、ただわたしを信頼していなさい」と繰り返し語ってくださいます。

もし、思いわずらうことがあつたら、自分を責めたりしないで、また心に蓋をしないで、正直に「神さま、僕は今、○○のことで思いわずらっています。助けてください」と祈りましょう。そして、ふと空を仰いでみましょう。野の草花を見てみましょう。

まとめ

思いわずらいはいつもつきまといますが、すべてを備えてくださる神様と共に歩んでいきましょう。

♪小鳥たちは♪（ホ85、こ10、こ改10）

聖書 マタイ6・25～34 テーマ 思い煩いからの解放

序論

(福井文彦)

人間が毎日生活していく上で食物や衣服は必需品です。イエスは空の鳥を養い野の花を装ってくださる天の神が配慮し、それらを与えてくださるのだから、その神を信頼して「思いわずらうな」と戒められました。

一、神への信頼

イエスはまず「空の鳥を見るがよい」と言われました。彼らは生活のために働くことは全くありませんし、食べ物を蓄えたりもしません。その彼らを神は養ってくださるのです。彼らは天の父が与えられるものを集めるだけです。まして、神は人を鳥よりも、はるかにすぐれた者として創造されたのですから必ず養ってくださいます。だから、ただ神を信頼することです。

次にイエスは「野の花がどうして育っているか、考えて見るがよい」と言われました。野に咲く花は「働きもせず、紡ぎもしない」のです。それでも神は「ソロモン」の「栄華」、その人工美よりも、美しく飾られました。神

は人よりも劣るものをこのように装われるなら、人間にもっと深い配慮をなさるはずです。だから、ただ神を信じることです。

人は働き、紡がなければなりません。しかし、これら一切のことをなし終えたら、あとは神の摂理にすべてを託すべきです。人は空の鳥を養われ、野の花を美しく飾られるのは「天の父」であるという信仰をもって、神に信頼することです。

二、思いわずらうな

25節から34節には「思いわずらう」(新改訳では「心配する」)が6回出ています。それに対してイエスは「思いわずらう」ことが不必要である理由を語っておられます。

①神は造られた「空の鳥」「野の花」を養ってくださるのですから、それらよりすぐれた私たちを養ってくださるのは当然です(26、30)。

②私たちはいくら「思いわずらって」も「自分の寿命をわずかでも延ばすことができない」のです(27)。人間の寿命は神が定められることですから、いくら思いわずらっても、少しも延ばすことはできません。それと同じように、いくら「思いわずらって」も問題の解決にはな

らないのです。

③父なる神は食物や衣服（人間の生活必需品）が私たちに必要なことをすべて知っておられます（32）。そのために愛をもって配慮し備えてくださいます。神は決して物質的な必要を軽視したり、無視したりはなさらないのです。だから心配するよりもまず神を信じることです（8）。

④あすのことを思いわずらってはならないのです（34）。人生にはその日その日の苦労があるのですから、一日一日の責任を果して生きることです。（あす（未来）のことは、神がご支配しておられるのですから思いわずらう必要がないのです。

三、まず神の国と神の義を求める

そこでイエスは「まず神の国と神の義とを求めなさい」と命じられました。（神の国）とは神のご支配のことであり、「神の義」とは神の正しさのことです。ですからそれは、私たちの生活と周りのすべての事において神の御支配と、神のみこころと栄光の現されることを求めて生活することです。言い換えると、自分中心の生き方ではなくて、神を主にして自分を従とする生き方です。それ

は、神に信頼し、服従して生活することです。

（そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう）とイエスは約束されました。

「これらのもの」とは食物や衣服だけではありません。私たちが人間として生きて行くときにはそうした物質的な必要のほかに、非物質的な皆さんの必要がありますが、それらも含まれています。例えば、健康、知恵、才能、霊的なものもそうです。それらはみな、人間は神によって生かされているものであるとの自覚に立って、神に信頼し、服従して歩むなら備えられると、イエスは言われました。そのような生き方こそは私たちを（思いわずらい）から解放して、平安を与え、神の目標に向かって働くものとするのです。

結論

最も大事なことは、「神の国と神の義」を求めていくこと、すなわち、神に信頼し、服従して生活することです。そうすれば、食物や衣服という物質的なものだけでなく、霊的なものにおいても、空の鳥を養い、野の花を装われる天の父は、豊かに与えてくださいます。

研究資料

(宮澤清志)

テキスト

25 何を食べようか、何を飲もうかと、…何を着ようか
この当時の思いわずらいのものは、食べ物、飲み物と着るものだったようである。イエスは、これらの思い煩いの代表的な要素を並べて、思いわずらうてはならないとお命じになったのであろう。思いわずらう もとの意味は「いろいろな部分に分裂する」という意味の言葉である。また、この言葉はそのような思いわずらいを中止せよ、という強い命令形で述べられている。ルカによる福音書第10章に登場するマルタは、まさにこのような状況だったと言える(ルカ10・41～42)。彼女は、なくてはならないただ一つのことを心を傾けるのではなく、必要ではない多くのことに心を裂かれていた。

26～27 私たちが読み違えてはならないことは、この節は、前節からの「思いわずらいからの解放」という文脈に沿って読むべきであって、空の鳥のたとえを人間の労働にからめて読んではならない。空の鳥 ルカの並行記事では「からず」となっている(ルカ12・24)。まくこと

も、刈ることも 農業におけるこれらの行為は、当時、男性の代表的な仕事とされてきた。したがって、この節では、男性に対する思いわずらいからの解放を述べているのであろう。あなたがたは(26) 強調された言葉であり、鳥に比べてあなたがたこそ、という意味合いの強い言葉であろう。自分の寿命(27) ある英訳聖書では「自分の身長に」という別訳をつける。いずれの訳も成り立つが、文脈上、「寿命」のほうが自然である。

28～30 こちらも前節までと同様に、「思いわずらいからの解放」という文脈の中で読むべき箇所である。野の花 新改訳では「野のゆり」となっているが、本来的な意味は「野生の花」という意味であり、特定の花を指す言葉ではないようである。紡(ぐ) この仕事は当時の女性特有の仕事だったようであり、前節までの男性と併せて、女性にも思いわずらいからの解放を、野の花のたとえを通して語られたものであろう。いずれにしても、重要なことは、野の花が短命であるにもかかわらず(30)、神はそれらを着飾らせ、養っていて下さる、ということである。信仰の薄い 「信仰がない」と語られていないことに注意したい。直訳すれば「信仰の小さい(少ない)」

者」という意味である。この言葉はマタイが好んで用いた言葉で（8・26、14・31、16・8、17・20、他にはルカ12・28のみである）、いずれも弟子たちにだけ用いられた言葉である。具体的には、信じるとは言いがらも実際はまったく信じていないことを指す言葉であつて、信仰の不完全とか未熟さを表す言葉ではない。

31 思いわずらうな 25節の言葉とは文法的に少々異なり、更に強い禁止の言葉となつている。

32 これらのもの 原文ではこの言葉が文頭に置かれている。これらのもの、すなわち食べ物、飲み物、着るものなどが強調して語られている。**異邦人** ここでいう異邦人とは、ユダヤ人に対する異邦人という意味ではなく、天の父を知らないすべての人々を指す（5・47、6・7）。

33 これまでは「思いわずらうな」という、神の民の消極的な生き方を取り上げてきた。この節は、一歩進んで神の民の積極的な生き方を述べる。神の国 神がご自身の恵みをもつて支配されることであり、また「天の神がご支配される力強い出来事」（織田）を指す。更に、山上の説教との関連で語られるなら、主の祈りを真に生き、祈る神の民の姿として現れる。**神の義** 全被造物に対す

る神の救いの御計画とみることができ。求めなさい求め続けるように、という意味。この命令は、生涯をかけて人間が求め続ける必要があるものである。**与えられる**（神によつて）加えて与えられる、たくさん与える、という意味の言葉であり、神は、求める人に対して、その人に必要なものを備えて下さる、という意味をもつ。

34 ルカの並行記事には存在しないマタイ独特の言葉。 思いわずらうてはならないことを再度警告されたのである。人間にとつては「明日」という日は死ぬまで存在する。しかし、明日のことは誰にもわからない。ゆえに、このわずらいから解放される道は、明日を支配される神を信じて、その神に自分のすべてを明け渡すことである。

参考図書 6月7日分と同じ。

聖書

マタイ5・43～48

タイトル
暗唱聖句

天の神さま、お父さま（父の曰）

天の父は、悪い者の上にも良い者の上にも、太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも、雨を降らして下さるからである。

マタイ5・45

目 標

天の父なる神の愛を知り、どんな人をも愛する者となる。

導入

（松浦みち子）

あなたはお父さんが好きですか？ どんなところが好きですか、嫌いですか？ 今日天の神さま、天のお父様について学びましょう。そして、「ありがとう」と感謝を表わしましょう。今年はオリンピックで世界中から人々が日本に集まりますよ。色々なことばでありがとうを言いましょう。英語は「サンキュー」、ドイツ語は「ダンケ」、中国語は「シェシェ」、ロシア語は「スパシーバ」、フランス語は「メルシー」もともといろいろな国の「ありがとう」がありますよ。

天の神さまのお心

天の神さまのお心は海のように広く、天のように高く人を分け隔てされません。どんな人も神様の面前では無くてならない尊い命です。「わたしの目には、あなたは高価で尊い。」（イザヤ43・4、新改訳）と聖書を通して語っておられます。

しかし、私たち人間の心には人を選び好みしたり、差別したりする醜い心が潜んでいます。イエス様は「隣り人を愛し、敵を憎め」といわれていることはみんながよく聞いて理解できる事ですが、私はあえて言います、「敵を愛し、迫害する者のために祈れ。」とおっしゃいました。皆さんの中に、今いじめにあつて苦しんでいる方がいるかもしれません。でも、絶対に自殺なんて考えないでくださいね。イエス様は、祈れ！と語っておられます。祈ることは呼吸です。苦しい思い、憎しみの心を声を出してイエス様に向けてはきだしてください。そのことを通して、新しい道が必ず開かれてきますから。イエス様は、「こうして、天にいますあなたがたの父の子となるためである。」と約束されています。敵を愛する者こそがほんとうの神の子であると言われたのです。なぜでしょうか。

イエス様の教え

「天の父は、悪い者の上にも良い者の上にも、太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも、雨を降らして下さるからである。」と言われました。つまり、神様は敵味方の区別なく、すべての者に等しく雨の恵み、太陽の恵みを与えてくださっているのです。「あなたがたが自分を愛する者を愛したからとて、なんの報いがあるのか。」「兄弟だけにあいさつをしたからとて、なんのすぐれた事をしているだろうか。」と、自分を愛してくれる者を愛するのは当然のことであって、取税人でも異邦人でもしているではないか、当然のことをしたからといって何の誇ることがあるかと、断言しておられます。

パウロもローマ人への手紙の中で、「あなたがたを迫害する者を祝福しなさい。祝福してのろつてはならない。」「だれに対しても悪をもつて悪に報いず、すべての人に対して善を図りなさい。」「自分で復讐をしないで、むしろ、神の怒りに任せなさい。なぜなら、『主が言われる。復讐はわたしのすることである。わたし自身が報復する』と書いてあるからである。」(ローマ12・14、17、19)と書き送っています。

最後に、イエス様は結論として、「それだから、あなた

がたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」と人々に語っておられます。私たちは自分の努力で完全な者にはなり得ませんね。いじわるされたら腹が立つし、無視されたら、悔し涙を流していつか仕返しをしてやろうなどという心も湧いてきます。しかし、自分の思いや考えのままに生きるのではなく、イエス様が十字架で私のために死んでくださったことを心に覚え、イエス様にならう者にしてください、どんな人も愛する心を与えてくださいと祈りましょう。

(あかし) 名古屋教会の近くに豊臣秀吉をまつる豊国神社があります。千成瓢箪の神輿を新調することになり寄付を求められましたが、松浦牧師が断ったところ大変な迫害にあいました。お神輿ご披露の日、刺身を食べた町の役員たちが食中毒を起こし入院の騒ぎとなりました。松浦牧師はすぐに病院を訪ね、癒しを祈りました、一命を取りとめた役員が手のひらを返したように「牧師の祈りによって助かった、キリストの神様はすごい!」と、褒めたたえるようになりました。私たちは地域にあつて祝福を祈る者として遣わされているのですね。

♪愛をください♪(ホ78、イン67)

聖書 マタイ5・43～48 テーマ 天の父の愛

序論

(福井文彦)

この箇所は、山上の説教の5・17～20の解説(適用)として、イエスが旧約の律法の中から引き出された六つの問題の最後です。その最後に、隣人愛を取り上げておられることは、決して無意味なことではありません。律法は、結局愛に尽きるからです。

一、敵を愛せよ

当時、律法学者やパリサイ人は、(「隣り人を愛し、敵を憎め」と教えていました。律法には「あなた自身のようにあなたの隣人を愛さなければならない」(レビ19・18)とはありますが、どこにも「自分の敵を憎め」という律法はないのです。

むしろ、「もし、あなたが敵の牛または、ろばの迷っているのに会う時は、必ずこれを彼の所に連れて行って、帰さなければならぬ」(出エジプト23・4～5)との規定がありました。ところが、律法学者やパリサイ人たちは、「隣人」を自分と同国人、つまり神の選民であるユダ

ヤ人に限定したのです。そして、ユダヤ人を愛し、異邦人は憎んでもよいと教えたのです。

しかし、イエスの「隣人」についての理解は全く違っていました。あの「よきサマリヤ人」のたとえ話によってもよくわかります。隣人とは人種差別を一切廃したすべての人であり、敵意とか好意を持っていることによって区別されないすべての人なのです。そのイエスが「敵を愛し、迫害する者のために祈れ」と教えられました。主が敵の中から特に「迫害者」を区別しておられるのは、他のどんな理由からの反対よりも、信仰のゆえになされる迫害が最も非情・苛酷だからです。

二、天の父の愛

イエスは(こうして、天にいますあなたがたの父の子となるためである)と言われました。私たちの敵をゆるし、迫害者のために祈ることによって、私たちが神の子とされるわけではありません。私たちは神の恵みとイエスへの信仰によって救われ、新しく生まれ変わり、神の子とされたのです。神の子は、愛なる天の父なる神に似るはずで、それゆえに、私たちが敵を愛する時、私たちはその愛の父にふさわしい者となるのです。

さらに、イエスは「天の父は、悪い者の上にも良い者の上にも、太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも、雨を降らして下さるからである」と言われました。父なる神は善人と悪人を区別できないようなお方ではありません。悪い者と良い者を区別なさった上で、公平にすべての人を取り扱っておられます。ここに神の公平が神の義と愛に基づいていることを知ります。

イエスは、自分を十字架につけた人々を前に、「父よ、彼らをおゆるしください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」(ルカ23・34)と祈られました。ここに敵をゆるし、迫害する者のために祈られたイエスの愛を見ることが出来ます。主は私たち罪人のために十字架上で死んでくださったのであり、それはイエスをこの地上に遣わしてくださった神の愛なのです(ローマ5・8)。

三、人を愛する者

イエスは「あなたがたが自分を愛する者を愛したからとて、なんの報いがあるのか。そのようなことは取税人でもするではないか」と言われました。これは、どんなモラルの欠けた人でも自分を愛してくれる人を愛するこ

とはできるのだ、ということですが。しかし、私たちは隣人を愛することはなかなかできません。また、他人に害悪を与えられると黙っていられず、復讐しようという気持ちで湧いてきます。

その私たちに對して、イエスは「それだから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい」と語られました。この完全は、知恵や力の完全でなく、愛における完全、全き愛のことです。この完全をきよめ(聖潔)と言います。「敵を愛し、迫害する者のために祈れるのは神の愛によるのであり、キリストの心によるのであって、聖霊によって神の愛が心に注がれて初めてできることです(ローマ5・5)。そして愛の領域で完全になるとは、混じりけのない、平等や不公平のない、透明純粋な愛をもって生活し行動することができるようになることです。

結論

神と交わり、イエスの血によってきよめられ(Ⅰヨハネ1・7)、聖霊によって神の愛を注がれ、愛が全うできる者を目指しましょう。

研究資料

(宮澤清志)

聖霊降臨主日より、マタイの「山上の説教」から「キリストの教え」という単元が始まっている。紙面の関係で、緒論的な事柄は割愛してきたが、必要であると考え、山上の説教の緒論的なことを少し見ておきたい。

マタイは、その福音書の中で、イエスが教えたことを5つの個所にまとめた。その中の一つが「山上の説教」である(あとの4つは10章、13章、18章、24・25章である)。マタイは、大宣教命令をもってこの福音書を締めくくる。マタイは、イエスの大宣教命令の中の「あなたがたに命じておいた小さいこと」(28・20)を、この5つの個所に「イエスの教え」という形で集めたのである。

さて、この個所は、21節から始まる一連の流れの中にある。これは、「『』と言われていたことは、あなたがたの聞いているところである」(21、27、33、38、43)と、律法の伝承を取り上げて、「しかし、わたしはあなたがたに言う」と、その伝承を否定し、イエスの新しい光の中でこの律法を解釈して見せたのである。

テキスト

43 隣り人を愛し、敵を憎め 前半部分の「隣り人を愛し」という言葉については、レビ19・18に言及されている。この戒めは、主イエスにとって、神に対する愛の戒めとともに最も重要な戒めとされている(22・34以下)。しかし、後半部分の「敵を憎め」という記述は、聖書をはじめ、ユダヤ教文献のどこにも見いだされてはいない。しかし、ユダヤ人たちに「敵を憎めとあなたがたは聞いています」と語ったイエスの言葉に対して、群衆やユダヤ人たちは反論していない。また、当時のユダヤ人社会の教えや文献からして「隣人」とは、同胞であるユダヤ人だけを指すと解釈し、他のあらゆる民族を、異邦人であり敵であると思え、と解釈できるようである。

44 イエスがその御国の民に命じられた言葉である。敵 直訳は「あなたがたの敵」であるが、「あなたがたから見の敵」というよりはむしろ「あなたがたを敵と見る人々」という意味であろう。御国の民には「敵」はいない。いるのは自分たちを「敵」と見る人々である。愛し感情的なものであるというよりは、むしろ強い意志を伴ったものである。**迫害する者のために折れ** ここに用

いられている二つの動詞は現在形で書かれている。ここでは、一般論としての命令ではなく、具体的な人々を想定して語っているようである。

45 こうして この接続の言葉と以前からのつながりによれば、敵への愛や迫害に対する祈りの結果神の子とされる、かのような誤解を抱く恐れもある。しかし、そうではない。むしろ、この「こうして」とは結果を表す。神の子とされた者は、その結果、そのしるしとして敵への愛や迫害者に対する祈りへと導かれる、というのである。天の父は、悪い者の上にも良い者の上にも、太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも、雨を降らして下さるからである 人間に対する神の働きは、人間の何かによって条件付けられるのではない。しかし、このことはユダヤ人たちには信じがたいことであった。なぜなら、契約の民であるユダヤ人は、神から特別扱いされていると信じていたからである。それは同時に、因果応報という考えを根底に持つ日本人と日本人キリスト者に対するメッセージでもあろう。

46 47 ここに「取税人」と「異邦人」とが道徳的に一段低い存在として例示されている。これは、もちろんイ

エスご自身が彼らを軽蔑したというのではなく、当時のユダヤ人の間における常識的な見解を採用したのであろう。あいさつ 単に挨拶を交わすというのではなく、挨拶をする相手に神からの祝福を祈る祈りが含まれる。

48 この箇所は、第一義的には今回取り上げた43節以降の結論部分といえることができる。しかし、それ以上にこの箇所は21節以降の締めくくりのみ言葉として読むことができる。その鍵となる言葉は「完全」という言葉である。ちなみにこの言葉は、並行記事のルカ6・36では「慈悲深い」と訳されている。しかし、マタイがここでいう「完全」とは、マタイの文脈から理解すると、人を差別することなく愛する、という意味に解することができる。この箇所は「愛」の対象としての「隣人」を定義づけているのである。その隣人に対して45節にあるように、公平に愛を注ぐという意味での「完全」を意味しているのである。なぜならば、それは「天の父」がそうであるからである。

参考図書 6月7日分と同じ。

聖書

マタイ6・7～13

タイトル

喜んで主の祈りをささげよう！

暗唱聖句

御国がきますように。みこころが天に行われるとおり、地にも行われますように。

マタイ6・10

目標

意味を知って「主の祈り」をささげる者となる。

導入

(飯田勝彦)

皆さんは「まさかのときの神頼み」という言葉を聞いたことがありますか？ 困難なことがあったときだけ神様を頼りにするという身勝手さを現した言葉です。

私たちは「まさかの時の神頼み」ではなく、毎日、神様を頼りにしているでしょう。頼りにしている人は、祈る人です。祈りとは、神様との会話です。

皆さんは、お母さんと会話するとき「ねえーご飯ちょうだい。おやつちょうだい。オモチャ買ってえ。服買ってえ。」とお願いばかりしていますか？ そんなことはないでしょう。学校で楽しかったことや、苦しかったことなどを話すでしょう。祈りとは、神様との親しい交わ

りです。

今日は、祈りについて一緒に考えましょう。

イエスが教えてくださった祈り

教会の礼拝では、毎回「主の祈り」が唱えられますね。皆さんの中には、毎日唱えている人もいるかも知れませんが、「主の祈り」は、実はイエスさまが教えてくださった祈りなのです。

イエス様はある時、弟子たちに祈りの心得を教えてくださいました。

- 一、人に氣に入られるたに恰好をつけた祈りをしない。
- 二、父なる神様の前に独りになって祈る。
- 三、くどくど祈らない。

「祈りは苦手です」という人がいます。何か特別なイメージを持っているのでしょうか？ 祈りとは、ありのままの姿で神様の前に出て、素直な気持ちを率直に伝えれば良いのです。「神様、今日は学校で嫌なことがありました。僕の心を守ってください。」「神様、おばあちゃんが入院します。早く元気になるようにしてください。」「教会の先生が忙しくしています。先生の健康を支えて

ください。このような祈りは、シンプルな祈りで神様は喜んで聞いてくださいます。イエス様は、主の祈りを通して身近に神様と親しめるようにしてくださいました。

突然ですが、愛とは何ですか？「寛容、情深い、ねたまない、高ぶらない」です。愛の中には、いろいろな素晴らしいものが含まれています。そのように主の祈りも「賛美、みこころの実現、必要のため、悔い改め、守り」が含まれています。祈りとは神様への「お願い」だけではないことが分かります。

①賛美「天にいますわれらの父よ、御名があがめられますように」

神様を賛美することも祈りなのです。皆さんは、よく賛美をしているでしょう。賛美を神様が祈りとして受け止めてくださり、喜ばれるのです。

②みこころの実現「御国がきますように。みこころが天に行われるとおり、地にも行われますように。」

神様は私たちを素晴らしい恵みによって支配しようと願っています。その神様のみこころが私や世界になされるように祈りましょう。

③必要のために「わたしたちの日ごとの食物を、きょう

もお与えください。」

毎日、食事ができることは当たり前ではありません。それは神様が私たちの必要を知っていてくださるからです。

④悔い改め「わたしたちに負債のある者をゆるしましたように、わたしたちの負債をもおゆるしてください。」

イエス様は「敵を赦し祈りなさい」と言われました。祈りは赦し愛する力を与えてくれます。また、自分が罪を犯したなら素直に神様に悔い改めましょう。

⑤守り「わたしたちを試みに会わせないで、悪しき者からお救いください。」

私たちの周りにはたくさん誘惑があります。それから守られるように祈りましょう。

まとめ

イエス様は私たちが祈りを通して神様にいろいろなことを話ができるように主の祈りを教えてくださいます。神様と関わると、心がさらに豊かにされます。

♪3つのやくそく♪（ホ120、イン50）

聖書 マタイ6・7・13 テーマ 主の祈り

序論

(石田高保)

ルカ11章によると主の祈りは、弟子たちが祈り方を教えて欲しいと願ったときイエス様が教えたものです。

一、主の教えて下さった祈り

「あなたがたの父なる神は、求めない先から、あなたがたに必要なものはご存じなのである」、主みずからがこのような信仰に立つておられたことは、神の子なのだから当然だとしても、驚くべきは私たちもその信仰に立てると保証している点です。親というものは、子どもが必要としているものをよく知っています。私たちの必要については、こちらから申し上げなければ神がわからないのではありません。祈るのは、私たちの必要なものについての情報を提供するためでもあります。また「異邦人のように、くどくどと祈る」(7)、祈る回数が多ければ多いほど叶えられるというものでもありません。熱心に祈らなければ、神様は必要を満たしてくださらないわけでもありません。そこでイエス様はクリスチャンの標準となる祈りについて教え

てくださいます。人間の祈り得る最高の祈り、究極の祈りです。

二、生活に密着した祈り

第1は、神様を賛美する祈り。「御名があがられますように」、神の素晴らしさができるだけ多くの人によつてあがめられることを祈る。「御国が来ますように」、より多くのクリスチャンが互いに愛し合う世界が来ますように。また、世の終わりに神ご自身の支配する時代が来ますように。「みこころが天に行われるとおりに、地にも行われますように」、神のご計画が地上で遂行されますように。

第2は私たちの必要を求める祈り。ここには私たちのありとあらゆる必要、霊的、精神的、肉体的、物質的な必要といったが含まれます。毎日、食べるものを与えて下さいと祈るように言われています。私たちは文字どおりの意味で毎日祈ることが求められています。食べられること、必要なものが手に入ることは、当たり前のことではなく、ことごとく神様からのプレゼントであるという信仰の姿勢を、この祈りは勧めています。

第3は、赦し赦されるための祈り。執り成しの祈りも含まれ、対人関係に関する祈りです。「負債(負い目)」は、ル

カ11・4では「罪」となっていますから、自分の罪という借金を赦して下さいという意味。〈日ごとの食物を、きょうもお与えください〉の後にあるということとは、この祈りも毎日するようにということではないでしょうか。つまり私たちは毎日誰かを赦したり、神と人から赦されたりする必要があるということになります。一日のうち、何人かの人たちと会う中で、カチンとくることがあるかもしれません。あるいは以前の出来事を思い出して腹の立つことがあるかもしれません。あるいは人に傷つけられたことで赦せない思いになるかもしれません。そのとき私たちはどういう選択をするのでしょうか。いつか仕返しをしてやろう、こんど会ったらこう言い返してやろう、相手が頭を下げてくるまでは赦すまいと思うのでしょうか。私たちは誰かを赦さなければならぬ存在です。「もしも、あなたがたが、人々のあやまちをゆるすならば、あなたがたの天の父も、あなたがたをゆるして下さいさるであらう…」(14)、もし人を赦さないままでいれば、今度は私たちが神様から赦してもらえません。それはあたかも自分で毒を飲んでおきながら、相手が害を受ければいいと思ひ込んでいるようなものです。

また私たちは誰かを赦さなければならぬとともに、神からも人からも赦されなければならない存在です。私たちが何らかの罪や過ちを犯したなら、ただちに悔い改め、神様から赦していただかなければなりません。一日に少なくとも一回は悔い改めの祈りをしたほうがよいでしょう。そうはいっても思い出せない時もあります。それでも「自分の気づかないところで罪を犯しているかもしれない」という謙虚さをもって、神の赦しを求めたい。「だが自分のあやまちを知ることができましょうか。どうか、わたしを隠れたとがから解き放ってください」(詩篇19・12)と。

第4は、守られるための祈り。悪しき者、つまりサタンの誘惑から守ってくださいという祈り。ここには私たちが誘惑に弱いという前提があります。残念ながらどんな人でも、どんな誘惑が来ても自力ではねつけられるという強さは持ち合わせていない。神の恵み、神の力が必要だから、この祈りをささげるのです。

結論

主の祈りにあらわされた祈りの基本形を身に着け、実生活に応用してゆきましょう。

研究資料

(小平徳行)

ここは「主の祈り」と呼ばれ、イエスが祈りの態度と祈るべき内容について教えている所である。私たちはこの祈りをささげるだけでなく、意味を味わいつつ、日々の生活において、自分の信仰として歩みたい。主の祈りの前半は神に関するもので、後半は人の必要に関するものである。この順序は大切である。

テキスト

7-8 ここでイエスは熱心な祈りを否定されたのではなく、無意味なくり返しは不必要であることを言われた。父なる神は私たちの必要はご存じであるから、信頼を持って祈るべきことを教えている。

9 父(ギ)パテール)アラム語では「アバ」であり、幼児が父親に話しかける時の言葉。神に対して最も深い親しみを表す「アバ」という言葉をもって祈るように教えたのはイエスが初めてであった。神は恵み深い父親として一人一人に限りない愛と関心を持ち、喜んでその祈りを聴こうとしているお方である(マタイ7・11)。われらの主の祈りは個人の祈りだけでなく教会の祈りでもある。

る。したがって、この祈りは神の家族を、とりなしの祈りと配慮をもって愛することを教えている。御名があがめられますように これは最も重要で基本的な求めであり、信仰生活の秘訣である。御名 神の本質、權威、立場などあらゆる面を含めた「神ご自身」を指す。あがめる(ギ)ハギアゾー)は「聖別する」の意。したがってこれは、神が全被造物から区別され、全世界が神を尊び、賛美し、礼拝し、感謝するようにという求めである。

10 御国がきますように キリスト者は、やがて来る神の国の先取りとして、現在、キリストの豊かな支配を味わっている。この祈りは神の支配が自分自身のうちに拡大されること、そして宣教の進展により、人々が回心すること、さらにキリストが再臨され、天の御国が完成することを求める祈りである。みこころが行われますように 地上で起こるすべての事柄が、神の望み通りに運ぶようにとの願いである。私たちは、自分を捨てずには、神のみこころを行うことを真剣に求めることはできない。これは従順を学ぶ祈りであり、イエスのゲッセマネの祈りにも共通する。ここまでの神に関わる祈りは、人の生き方を根本的に変えてしまう。この祈りを真実にさ

さげるためには、祈りの一つ一つに「私のうちに、私を通して」と付け加え、自らを神にささげるべきである。

11 わたしたちの日ごとの食物を、きょうもお与えください 私たちはこの祈りにおいて、自分のいのちと全宇宙が神に支えられていることを覚えることが大切である。物質的な必要のために祈ることは自らが神に依存していることを認め、神をあがめることになるのである。日ごとの食物 その日、その日に必要な食物。かつて神はご自身の民のために、荒野で40年間マナを備えられ、毎日の必要を満たされた。ここでは食物に限らず、生活に必要なすべてを含んでいると考えてよい。神は霊的な必要と同様に物質的な必要も配慮してくださるお方である。

12 わたしたちに負債のある者をゆるしましたように、わたしたちの負債をおゆるしてください。負債（ギ）オフェイレーマ）は借金に対して使われたが、次第に、神に対して負い目をもっているという意味で使われるようになった。他の福音書では、「罪」（ギ）ハマルティア）が使われている（ルカ11・4）。クリスチャンは信仰によって義と認められたが、なお罪の赦しを必要としている者である（ヨハネ13・10）。ゆるしましたように この動詞

の時は不定過去であり、すでに完全に赦し、もはや何のこだわりもないというニュアンスが込められている。イエスは他人の罪を赦すべきことを14・15節や、たとえ話でも語っている（マタイ18・21・35）。神の赦しの恵みを深く味わった者は他者の罪を赦すことができる。

13 わたしたちを試みに会わせないで、悪しき者から救いください 私たちがこの祈りをささげなければならぬのは、常に私たちが危険にさらされており（1ペテロ5・8）、罪や悪に対して弱く、自分の力や知恵で打ち勝つことはできないからである。これは自分の弱さを認め、救って下さる主に信頼する祈りである。新改訳では最後に「国と力と栄えは、とこしえにあなたのものだからです。アーメン」と記載されている（新改訳2017では欄外注として）。最古の写本ではこの句は欠けているが、初代教会は、主の祈りを公の礼拝にふさわしく整えるため、かなり早い時期にこの頌栄を付け加えた。私たちが祈り求めるのは主の御力に根拠があるためである。

参考図書 中澤啓介『マタイの福音書註解（上）』（いのちのことば社）、J・I・パッカー『私たちの主の祈り』（いのちのことば社）他

牧羊ひろば



西舞鶴教会 教会学校

●毎週の教会学校

私たち夫婦は、二〇一七年春、西舞鶴教会に任命されました。着任早々驚いたのは、1歳余りの幼児から小学5年生までの子どもたちが、毎週10名ほど来ていること。尋ねてみると、6つのクリスチャン・ホームがあり、子どもたちが親と一緒に来ているということで、「これはチャンス!」と思いました。さらに、この6つの家庭の親たちも、クリスチャン・ホーム育ちの方が多かったのです。このような背景の中で、現在の教会学校の形が生まれてきました。

最初の一年間は、それまでどおり、朝9時半から10時までの30分間の短い教会学校でした。10時15分からは、母親が子どもたちをそばにおいて、母子室で礼拝を捧げていました。しかし、親も子どもも、落ち着いて聖書の話を聞けません。そこで、教会学校の

教師会と役員会で何度も話し合い、二年目に大きな改革をしました。わかりやすくまとめると、次の4点です。

- ① 10時15分からの礼拝の最初の20分は、会堂で大人も子どもも一緒に礼拝を捧げる。賛詠・司会者の祈り・主の祈り・CS賛美の後に、子どもとCS教師は階下に移動し、教会学校礼拝と分級を行う。
 - ② CS教師を助けるために、「お助け隊」の一員に加わる信徒や親たちを募り、月に一度だけは、交代で、教会学校に出席して奉仕していただく。
 - ③ CS教師と「お助け隊」の兄弟のために、毎週朝9時半から10時まで、礼拝説教が語られる。
 - ④ 月に一度、最初の賛詠から最後の祝祷まで、会堂で大人と子どもの合同礼拝を捧げる。牧師は15分ほどの子ども向けの説教をする。全体で40分ほどの合同礼拝の後、子どもたちは階下で教会学校の分級をし、大人は会堂で、大人向けの説教を聞く。
- この改革によって、次のような結果が生まれました。
- ① 教会学校のために約1時間が確保されたので、落ち着いて分級ができる。
 - ② CS生徒の親たちも、落ち着いて礼拝説教が聞ける。

③お助け隊の姉妹をはじめとして、教会員の中に、子どもたちに対する愛がより深くなり、教会全体で子どもたちを育てていく意識が強くなる。



教会学校風景

今、一番大きな祈りの課題は、中学科です。不定期で牧師夫人が礼拝説教をする時をもち、牧師が中学科で教えています。でも、何とか毎週、中学科がもたれ、明確に主イエスを信じる決断に進んでほしいと祈っています。

す。親から受け継いだ信仰のバトンが、確実に次世代に受け継がれることが願いです。

感謝なことに、母親の中で二人の方が受洗されました。そして、月に一度「ママの会」を開き、家庭における宗教教育について学んでいます。また、小学校6年生の女兒が昨年のクリスマスに受洗しました。彼女に続く子どもたちが次々に生まれるように祈っています。

(牧師 鎌野善三)



ママの会賛美

●教会学校の特別な行事

私たちの教会では、近隣の子どもたちに教会へ来てもらうため、毎年6月には子ども大会、12月には子どもクリスマスを行っています。



子ども大会会場

1. 子ども大会

長年、地域の3〜4つの小学校で登校時にちらしを配布してきましたが、ここ数年は、外部からの来会者はな

しという状況が続いていました。そんな中、二〇一九年の子ども大会では、名古屋東教会の取り組みを参考に、地域に開かれた教会として、地域の人々や子どもたちに気軽に参加してもらおうと、これまでとは内容を大きく変えて実施しました。子ども向けには、バスボムづくり、聖書のビデオ上映と鎌野牧師のおはなし、綿菓子づくりの3つの体験を、スタンプラリー方式で行いました。また大人向けには、バザーとカフェコーナーを設けました。学校前でのチラシ配布だけでなく、初めてこのチラシの新聞折込もしました。



バスボム作り

学校の前でもらったチラシを手に、初めての子どもたちが次々教会にやって来ました。スタンプシートにスタンプを3つ押してもらえば、最後に綿菓子づくりができます。一度の子ども大会にこんな多くの来会者があったのは初めてのことです。子どもたちが誘ってきてくれたお友だちもいました。また、教会学校生徒の保護者が友人や知り合いの子どもたちをたくさん誘ってくださったこともあり、画期的な子ども大会となりました。



綿菓子

婦人会が準備くださったバザーでは、家庭からのリサイクル品をはじめとして、手作りのかわいいアクセサリや小物、布製品、新鮮なお野菜などが色とりどりに並べられました。教会員も楽しくお買い物ができ、売り上げは「国際飢餓対策機構」に寄付することができました。

2. 子どもクリスマス

クリスマスは12月25日に一番近い日曜日の午後に実施しています。学校前でちらしも配布してきました。しかし、あまり来てもらえません。そこで、ここ数年は、教会学校の生徒たちがお友達に招待状を渡して誘い、みんなで楽しむ行事にしています。クリスマスDVDの上映、お話し、劇などの出し物、工作、ゲームといったプログラムです。教会学校の子どもたちが高学年になってきたので、ようやく子どもたちが出演する劇などにとりくむことができるようになってきました。

3. その他のイベント

主なものは、以下の4つです。

★夏期学校は、以前はお泊りできていた時期もあったのですが、子どもたちが少なくなったので、夏休み中の日曜日の午後にすることが数年続きました。しかし、昨年度の夏は教会を飛び出し、「雲の上のゲストハウス」という郊外の宿泊施設で、父親たちが作った竹の樋で流しそうめんを味わいました。その他、すいかわり、水遊び、お泊りという、自然いっぱいの中での楽しい時を過ごしました。



夏期学校 その1

★もちつき大会は3月に実施で、教会にある石臼を使ってもちつきをします。大人に手伝ってもらいながら、子どもたちが杵で餅つきを体験し、餅にあんこを入れて丸めたり、つきたてのおもちで作ったおろしもち・きなこもち、それに、たこ焼きなども作って、おなかいっぱいいただきます。

★子ども祝福礼拝は11月に実施。大人との合同礼拝の中で、子どもたち一人ひとりのために牧師が頭に手を置



もちつき大会

いて祝福の祈りをします。今年は21名の子どもたちが祝福にあずかりました。子どもたちのためのおいしいご馳走を婦人会の皆さんが準備くださり、子どもたちにはお祝いのデザートが一品添えられます。食事の後には、子ども一人一人に、大人たちが順番にお祝いの言葉を伝えていきます。教会学校教師以外の大人たちも、子どもたちのために祈り、見守ってくださいていることを実感する時です。

★みことば暗唱大会は、10月と3月に、それぞれが教会学校で覚えた金言を一人ずつ暗唱します。学年の数だけ覚える必要があるので、上級生の子どもたちは結構大変です。がんばって発表した後にはおいしいごほうびが待っています。

毎週の教会学校と、年に数回のイベントがうまくかみあって、子どもたちが教会学校に出席するのが楽しいものとなるよう、祈りつつ奉仕しています。教会全体で、子どもたちを育てていくことができれば本当に嬉しのです。

（教会学校教師 山口栄子）



夏期学校 その2

二〇二〇年度カリキュラム解説

今年度より、新しい三か年カリキュラムが始まります。今回も、これまでのカリキュラムのリソースを活用した部分がかなり入っていますが、全体の4割近くは新たな箇所を取り上げています。旧約聖書は3年かけて、原則として歴史順に学び、新約聖書は各年、いずれかの福音書を中心にイエス様の生涯を一通り学ぶことができます。その他、教会暦や行事に合わせたカリキュラムも盛り込んでいます。

①旧約聖書

旧約聖書からの学びは、創世記を重点的に取り上げます。また、2月にはイスラエルの指導者としてモーセ、ヨシヤと二人の士師を取り上げます。

②新約聖書

新約聖書は、マタイとマルコの福音書を中心に「キリストの教え（と働き）」を学びます。山上の説教など、よく知られている箇所を中心に取り上げています。

③教会暦・年間行事によるカリキュラム

昨年度末の単元「キリストの十字架への道」に続き、年度初めには「受難・復活」の単元が置かれます。年末からは「クリスマス・年末年始」、年度末には「キリストの十字架への道」の単元が置かれ、翌年度の受難週に続いていきます。

④テーマ「造り主なる神を知る」（創世記1・1）

今年度のテーマは「造り主なる神を知る」です。創世記やキリストの教えの学びなどを通して、神様がどのようなお方であるのかを確認しながら、正しい信仰が培われ、深められていく一年となるようにと願っています。

なお、「カリキュラム」は教会教育室ホームページからダウンロードしていただけます。また、「ワーク（A～C）」、「子ども聖書日課」、「中高科へのヒント」に加え、「み言葉カード（カラー、主要5訳対応）」、「フラッシュカード（白黒、カラー）」も無料でダウンロードできますので、ぜひご利用ください。

おわりに

『牧羊者』二〇二〇年度第Ⅰ巻をお届けできますことを感謝します。また、執筆者のご労に感謝いたします。巻頭言は関西聖書神学校校長の鎌野直人師が執筆してくださいました。教師養成講座は前号に引き続き香登教会牧師の工藤弘雄師が執筆してくださいました。「牧羊ひろば」は西舞鶴教会のCSを紹介していただきました。なお今号から「礼拝メッセージ例」、「聖書講解」、「研究資料」の順番とさせていただきます。今号の執筆者、奉仕者を紹介いたします。

『牧羊者』のご購読・ご利用について

* 分級用に、ワークA(幼稚園向け)、B(主に小学生1～3年生向け)、C(主に小学生4～6年生向け)を用意しています。また、付録として「子ども聖書日課」、「フラッシュカード」、「み言葉カード」、「中高科へのヒント」があります。いずれも、下記ホームページから無料でダウンロードできます。送付ご希望の方には、ワークは各600円+税でお送りします。
信徒局 教会教育室 ホームページ
<http://cs.jccj.info/>

* ご注文は、日本イエス・キリスト教団(事務局)まで。申込み、部数変更等のための用紙も、上記ホームページからダウンロードできます。
神戸市兵庫区塚本通3-3-19
電話 (078) 575-5511
FAX (078) 575-6611

メッセージ例	後藤 真師	和田牧子師	土屋開夫師
聖書講解	飯田勝彦師	松浦みち子師	
研究資料	小泉 創師	石田高保師	高橋頼男師
	大頭真一師	福井文彦師	
	辻林和己師	小平德行師	金井由嗣師
	加藤 満師	宮澤清志師	中島啓一師
ワーク(A)	吉田美穂師	宇野真佑美師	鎌野 幸師
(B)	山下大喜師	勝田幸恵師	野勢かほる師
(C)	竹崎光則師	勝田幸恵師	田中裕明師
	上森恭子師		
中高科へのヒント	八幡直人師	三輪正見師	後藤健一師
子ども聖書日課	石田高保師	金田ゆり師	田中愛子師
フラッシュカード	小野淳子師	柴田福音師	後藤栄子師
	加藤 満師	柴田福音師	
	丹羽 遥師	松浦あん師	
み言葉カード・イラスト	加藤 満師	柴田福音師	後藤栄子師
	松浦あん師		
ワープロ打ち込み	多田豊子師		
校 正	後藤健一師	中島啓一師	

また、事務作業・発送の教団事務所の兄姉、印刷の松木共栄印刷、菱三印刷に心から感謝いたします。(中島啓一)

聖書教育教案誌 牧羊者

二〇二〇年度 Ⅰ巻

二〇二〇年四月一日発行

発行所 日本イエス・キリスト教団 信徒局 教会教育室
企画監修 日本イエス・キリスト教団 信徒局 教会教育室
神戸市兵庫区塚本通三-三-一九

印刷所 菱三印刷株式会社
電話 (078) 575-5511
FAX (078) 575-5511
電話 (078) 575-5511

* 日本聖書協会『口語訳聖書』使用許諾済み